
とある学園の風紀委員長（コマンダー）

平々凡々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学園の風紀委員長^{コメンター}

【Nコード】

N5320T

【作者名】

平々凡々

【あらすじ】

学園都市の治安を守る「警備員」と「風紀委員」 この物語は風紀委員の頂点である風紀委員長、『刃宮 守』の物語です

初投稿です 下手くそですいません

平穏な日常

彼は逃げていた。

暗闇の中を。

たった独りで。

後ろからは鉄パイプを持った者や、火を手にした者達が追ってくる。

今までも、何度もあった。

夜道を歩いていると、必ず襲われる。

彼は小学3年生の頃からこんな目に遭っている。

その度に、今の時代では考えられない程の死の恐怖から逃げていた。

その度に思った。

『強くなろう』と。

（守side）

彼、『刃宮 守』は高校1年生になっていた。

守「はぁ、疲れた」

特に何かしている訳でもなく

ただ座っているにも関わらず

こんな愚痴を漏らしていた。

？「しゃきつとしなさい！ 貴方は委員長なんですよ！？」

守「ひゃあ！？」

ぼーっとしていたため、その存在に気づかなかった。

今話しかけてきたのは、幼馴染みで委員長補佐をしている『上原瞳』だ

守「お、脅かすな！ 入るときはノックしろっていつも言ってる！」

瞳「ノックしたけど反応しなかったんでしょ！ 全く……」

そう言って「ドンッ」と机の上に置かれたのは書類の山。

瞳「暇なんですよ？ 仕事よ」

守「えー？」

瞳「駄々こねない！」

そう言っただけで瞳は部屋を出た。

残された守は「はあ」とため息をつきながら、静かになった部屋で

一人、窓の外を見上げていた。

数時間後、瞳に「一枚もやってないの!？」と怒られて、明日のノルマとなった。

翌日

守「ひどい目に遭った」

本日は土曜日

世の学生は休日だが 刃宮 守は先日のノルマで丸一日潰れることになった。

もちろん 瞳は付き合ってくれてはいたが、手伝ってはくれなかった

守「んー 4時かあ まあ、ノルマもすんだし、帰るか」

と 独り言を言い、身支度をする。

守「さて、と」

身支度を済ませ、いざ帰ろうとしたとき

?「いーんちよー!」

その瞬間

ドカツという音と共に 守は吹き飛んだ。

守「　　いつ「終わりましたかー？」てーよバカ！　だからノックしろと言ってるだろ！　伊月！」

伊月と呼ばれた少女は『伊月　明』

彼女は　小学４年生にして立派に風紀委員としての仕事をこなしている。

明「終わったんでしょー？　瞳さんが待ってるよー」

守「んー　そうか。わかった」

外に出ると、瞳が待っていた。

瞳「早く帰りましょ　全く、守のせいで一日丸潰れじゃない」

守「なんだよ、手伝ってくれば　もっと早く終わったよ」

瞳「守の仕事でしょ？　あんたが昨日サボるからよ」

ほんとの事だから何も言えない

守「はいはい」

俺は　ため息混じりに返事をした。

瞳「じゃあ　また明日」

守「（ん？ 明日？） ああ」

そう言つと瞳は反対方向に帰っていった。

守「（明日は休もう）」

そう心に誓い 俺も家に帰るのであった。

守「ただいまあ」

誰もいない寮の玄関で そう独り言を言つて部屋に入る。

部屋に帰ってくるなり ベッドに横たわり 眠りについた。

委員長の初仕事！（前書き）

読みづらいかもしれませんが

少しずつ慣れていくのでよろしく願いますm（
—
—
）m

委員長の初仕事！

翌日

〈守side〉

守「なんで？」

瞳「何が？」

現在、本部

休みのはずなのになぜ？

瞳「貴方は委員長なんだから当然でしょ？」

守「え そうなの？」

瞳「だからまた明日って言ったのよ？」

守「（何てことだー）」

実を言うと私、委員長にはなったばかりでして、高一になったことで推薦で委員長になったのですが、まだ高校に入って1週間、分からないことだらけです。

守「え？ じゃあひよつとして休み無し？」

瞳「無しって訳じゃないけど、それでもこれ（風紀委員）が優先よ」

守「じゃあ何かあったら呼んでくれ。　じゃ」

とドアノブに手をかけた瞬間

守「ゲフッ」

奥襟を掴まれ、椅子に強制送還

守「土日くらい休ませろよ」

瞳「土日の方が忙しさに決まってるでしょ!」

そんな話をしていると

《　指令、177支部より増援要請　》

守「何があつた?」

《　多数のスキルアウトが銀行強盗の後、周囲を囲まれた事で人質をとった模様。至急　銀行へ向かってください　》

守「分かった　すぐ行く。　伊月!」

明「はいはい。解ってますよ!。現場でいいですか?では『お願いします』ねー」

ヒュン!!

銀行前には、多くの野次馬がいた。

瞳「通してください！ ジャッジメントです！」

瞳がそう叫ぶと、銀行までの道が開けた。

強盗A「大人しくしやがれ！ 殺されてえのか！」

？「大人しくするのは貴殿方の方ではありませんこと？」

守「（ん？ この THE・お嬢様みたいなしゃべり方は（

」

黒「ジャッジメントですよ！」

守「（やっぱり）」

彼女 白井黒子は 事ある毎に始末書を書いている奴だ。

昨日の山のような書類の中にも チラホラ始末書があった。

俺はこれでも 風紀委員長だから そういった始末書も 見落とす
こと無く見ておかねばならない。

俺は委員長になったばかりだが、白井黒子と 初春飾利 の名前は
覚えることが出来た。

そんなことを思っているうちに

強盗A「く・くるなああ！！ ゲエツ！」

蛙のような鳴き声と共に強盗Aは拘束された。

よく見ると 他の強盗共も 壁やら 地面やらに縫われている。

黒「これにて一件落着。あら？貴方は委員長ではありませんせんこと？」

守「ああ。おつかれさん」

瞳「お疲れさまです」

守「なんとかなるならはじめから呼ぶな」

瞳「まあまあ。どうやら大丈夫のようね。じゃあ私たちはこれで

」

黒「お呼びだてして申し訳ありませんでした」

白井はそう言つて「ペコリ」とお辞儀をして 後始末をするために走っていった。

瞳「白井さんは、正義感が強い人よね。この前も、『拘束した人数で 風紀委員の中で一番だったとか」

守「管轄外で仕事して、始末書書かされて無けりやな」

現在、本部へ帰ってます。

明はレベル3の空間移動なので、帰りはテレポート出来ない。

その時

ドゴーン！！！！

と 爆発音が響いた

すぐさま 爆発音がした場所へ向かい

守「ジャツジメントだ！」

と 警告する

するとそこには

不良A「チツ もう来やがったか！」

不良B「問題ねえ まだ二人だ！」

不良C「試してみるか（ニヤツ）」

そう言うと 不良Aは手から水を出し、不良Bは手から炎を出し、
不良Cは空き缶を握っている。

不良達の後ろには砕けた壁が見える

守「（水の方は大体レベル2 。火の方はレベル3か 。空き
缶の奴は『強化能力^{アップフォース}』か？ レベルは3つてどこか 。壁のひび
割れは水の方の高压水流か？ いや あり得ない レベル2では
あれだけの破壊力は無いはずだ ）
」

不良ABC「『行くぜ！！』」

そう言うと、空き缶の中へ水を入れ 水の入った缶を熱し始めた。

守・瞳「「!？」」

不良C「準備完了だ！ 吹き飛ばし！」

不良Cが叫ぶと同時に 持っていた缶をこちらに投げつけてきた。

その瞬間

激しい突風が二人を襲った

周りは飛散した水蒸気で霧がかかっている

不良A「殺ったみてえだな」

不良B「俺らのコンビネーションを食らったんだ。無事ではねえな」

不良C「ジャツジメントも大したことねえな」

守「誰が？」

霧が晴れるとそこには かすり傷一つ負っていない2人が立っていた。

不良C「な・なぜだ！」

不良A「俺達の最大出力だぞ!？」

守「説明してほしいのか？　良いだろう。　今、お前達がやったのは『水蒸気爆発』だな？　空き缶の中に水を入れ、その水を熱することで高温高圧にし、爆発させたんだ。　空き缶を強化して　高温高圧に耐えられるようにしたんだろ？　発想はいい、あの爆発は　高温の爆風を発生させるからな。　破壊力は相当なものだ。　だが、解ってしまえばどうともなる。　距離をとるか、何かに身を隠せばいいんだ。　さて　もう良いだろう。　。　お前達を拘束する!!」

不良B「クソッ　もう一度だ！　あつっ！」

瞳「もうさせないわ！」

気づくと、不良達は炎に囲まれていた

瞳「降参するか、丸焦げになるか　どっちがいい？」

こうして　無事拘束し、警備員に身元を引き渡した

二人は本部へ戻り、拘束したことについてや、それに伴った損害等を報告書にまとめ、寮に帰った

守「　疲れた」

俺は寮に戻り、深いため息をついた

守「寝よ」

俺は 深い眠りについた

オリキャラ紹介（前書き）

とりあえずこんな設定です（^| ^ ; ;）
頑張って考えました（-o- ; ;）ノ

少し編集しました

オリキャラ紹介

刃宮 守

《じんぐう まもる》

身長162?、細身

少し長い黒髪、癖毛

常に特殊なニット帽を深く被っていて、素顔を見たことがある者は少ない

風紀と書かれた長ランを着ている

極度のめんどくさがり屋だが、責任感が強く、その為風紀委員長をしている

「置き去り」で、小学2年生から施設で暮らしていた

仲間を何より大切にしており、それ故傷つけられることを嫌う

能力 『能力解析』

《アナリスト》

レベル4～5

『能力解析』は、相手のAIM拡散力場、もしくは能力に、自分の能力を「干渉」させ、「種類」「レベル」などを解析する能力

(応用)

『能力封じ』

《スキルキラー》

解析結果から、相手の能力を中和、相殺する

『能力強化』《スキルアップ》

対象者の演算を補助し、能力を引き上げる（伊月の空間移動で、現場に行けたのはこの為）

『能力写し』

《スキルトレース》

相手の演算を把握し、同じ能力を発現する

しかし、自分の攻撃が無いため、瞳の『大炎使い』を記憶し、それを使ったりしている

尚、AIM拡散力場に敏感なため、相手の感情の昂りなどが分かる。

AIM拡散力場に敏感で、なにもしていなくてもあまりの情報量で疲れてしまうので、力場の干渉を低減するニット帽を被っている。その為、レベル4になっているが、それを踏まえた上でも、レベルが高いことが分かる。

使える能力は、人の物なので『多重能力』ではないが、2つまでなら影響無く同時に発現できる。3つ以上は脳に負荷がかかり、鼻血が出たりする

上原 瞳

《かんばら ひとみ》

身長158?、細身

お尻まである長めの黒髪

守をいつもサポートしてきたので守の事を誰より理解している

守と違い、しっかり者でどちらが委員長か分からないが、彼女曰く

「守も、やればできる子」だそうだ（子供扱い）

「日常モード」と「仕事モード」があり、守の呼び方も違う

能力 『大炎使い』

《ファイアンマ・マスター》

レベル4

『大炎使い』は、その名から分かるように 炎を使う

熱量は最大出力 摂氏3千度

必殺技は 『偉大な太陽』 《グレート・サンシャイン》

伊月 明

《いづき あかり》

身長130?、細身

ポニーテールの茶髪

守とは小学2年生の時に助けてもらったことから知り合い、その時から風紀委員になった

本部には守の就任時に引き抜かれた

語尾を「～ですよー」等と伸ばすのが口癖

能力 『空間移動』

《テレポーター》

レベル3

『空間移動』はレベル3の為、守の『能力強化』が無ければ平均的
白井黒子に憧れており、ダーツを持ち歩いている

同時に16本のダーツを別々のところに移動させることが出来る
必殺技は『張り付け!』

黒子が拘束するときに地面に張り付けるのと同じ

オリキャラ紹介（後書き）

原作はもう少し後です

それまではオリジナルで行きますm（
|（
m

身体検査（前書き）

オリキャラ紹介少し編集しましたm（
—
）m

身体検査

月曜日

「守side」

とある寮の一室

目覚まし時計のアラームが鳴り響く

ピピピピッ

ピピピピッ

ピピ

カシャッ

守「

遅刻だー!!」

現在、朝礼の20分前

守「ヤバイヤバイヤバイ!!
言われるか」

遅刻なんかしたら瞳に何て

急いで身支度をして

玄関に向かったとき

当麻「不幸——だ——！！！！！」

上の階から悲痛な叫びが

俺の上の部屋には『上条 当麻』が住んでいる

同級生で同じクラスだ

俺は本当は、長点上機学園から推薦があつたのだが、当麻の能力に興味がわいて わざわざ推薦を蹴って同じクラスになった

守「 許せ 当麻
」

俺は見捨てて、部屋を出た

小萌「そうゆうことで今日は 先週の予定通り、『システムスキャン身体検査』を行います。各自、測定場所へ行ってくださいね」

見るからに小学生同然の女の人が教卓に立っていて、青髪ピアスが「小萌センセはいつもかわえ〜わあ〜」と言うような笑顔で 朝礼を終わらせた。

俺は朝礼には間に合ったが、窓を割って入ったことで、「刃宮ちゃんにはお話が必要ですかね〜」と小萌先生に言われ、ビクビクしながら椅子に座っていた。

当麻「遅れてすいませーん!!!!!!」

その時 何故かボロボロの当麻が土下座状態で廊下を滑ってきた。

小萌「刃宮ちゃん、上条ちゃんを連れてきてください」

守「 許せ 当麻 」

俺は当麻の奥襟を掴み、先生についていった。

〜一時間後〜

守「あ————」

当麻「あ————」

そこには 廃人になった二人の男子生徒がいた。

〈数十分後〉

《 総合評価1 》

自分の番を待っているとき

守「（そう言えば）」

〈数日前〉

瞳「ねえ、風紀委員にも、そろそろレベル5が欲しくならない？」

あからさまに、「早くやる気出せよ」と言うように、瞳は俺に言った

守「そうだな、『超電磁砲』でも誘ってみろよ」

瞳「そうじゃないわよ、あんたがやる気出せばなれるんじゃないの？」

守「あのなあ、レベル5なんてそうそうなれるわけ無いだろ？」

まあ 確かに、本気出せばどの程度行けるかは分からないが

瞳「今度あんたの学校でも身体検査あるでしょ？ 今回は本気でやりなさいよ、委員長！！」

守「はいはい」

俺が曖昧な返事をしてその話は終わった

（現在）

守「（レベル5ねえ、どうかなあ）」

《次！ 刃宮 守！》

守「はい」

教師A「君は、先程の彼の能力を使ってくれ」

先程の彼とは、風力使いのレベル2の人だ

守「分かりました」

グラウンドの真ん中まで歩いていき、目をつむりする

演算を開始

守「行きます！」

そう言って、風力使いを発現する

今使っているのは『能力写し』と『能力強化』だ

グラウンドに サイクロンが生まれる

守「（ あ 帽子取るの忘れてた ）」

機械的な声が測定結果を告げる

《 総合評価『4』 》

守「（ やべえ ！ ）」

帽子を取れば、レベル5になったかは分からないが 、それだけでも大分違う筈だ

守「（ ミスったーーーー！！！！ ）」

この日の放課後、瞳は口をきいてくれなかった

身体検査（後書き）

原作までまだ長いですね

どうしょうか (^ | ^ ;)

T r y a g a i n (前書き)

いつまでオリジナルで行こうかな

(- o -)

Try again

身体検査から一夜明け

放課後

（守side）

守「なあ」

瞳「」

守「（ハア）」

測定結果が気に入らないらしく、まだ口を利いてくれない。

守「機嫌直せよ 悪かったよ」

瞳「」

守「その、あれだ　　帽子さえ取つとけば、俺だってレベル5だよ　　多分」

瞳「　　じゃあなんで取らなかったの？　　ひょっとして、ナメてる？」

忘れてたとは言えない

呆れられるか、下手するともっと機嫌悪くなる

守「いや！　　決してそんなことは！！！」

瞳「じゃあ取らなかった訳は？」

守「え？　　んー、ほら、俺いつも帽子被ってるだろ？　　だから　　その　　そう！　　いつもの状態じゃないと意味無いと思って！！！」

この時　　自分でも分かるほどドヤ顔していた

恥ずかしい

瞳「ふーん、そ」

守「（あれ？ ひょっとして　まずった？）」

態度には出さないが、俺には解る　こいつは今　機嫌が悪い！

明「コンコーン！！！！　失礼しまーす！」

伊月がまたノックせずに入ってきた　ノックのつもりなんだろう
が　ノックの意味がない！！

守「お　おう、どうした？　なんか用か？」

まあ　重い空気だったし、今回は許そう

明「いやゝ　あるけど無いものってな〜んだ？」

守「結局無いんだろ　」

明「あつたり〜 さつすがいいんちよー!」

守「別に嬉しくない、で、今日の仕事は済んだのか?」

明「え〜っと〜 完成と未完成の違いってな〜んだ?」

守「要するに出来てない(未完成)、なんだな?」

明「そ〜です」

守「早くやってこい」

明「息抜きなのに」

トボトボと部屋を出ていく伊月と代わるように電話が鳴った

《プルルルル プルルルル プル》 《ガチャ

瞳「 はい 居られます はい (二カッ) 分かりました、直ぐに行くように伝えます。失礼します」

守「え なに？」

ズンズンと 瞳が近づいてくる　そしてそのまま帽子を奪われた

守「　ウグッ！　なにを　」

瞳「アンタだけでもう一度身体検査するんだって」

守「何故！？　普通新学期だろ！？」

瞳「お偉いさんが、あんたの結果気に入らなかったんだって」

守「　そういうことか　。とりあえず帽子返せよ」

瞳「駄目よ、これは罰　と　弱みなんだから」

守「　何でそんなに『肩書き』にこだわるんだよ？」

瞳「　肩書き？」

守「何でそんなにレベル5にこだわるんだよ？」

瞳「あんたは何も分かってない。その『肩書き』が、学園都市ではどれ程の影響力を持つのか！！」

守「え？」

瞳「貴方が超能力者になれば、それだけで犯罪行為の抑止力になるのが分らないの！？」

守「」

瞳「この学園都市の風紀は俺が守るって、言ってみなさいよ 委員長なら 本気、見せなさいよ」

守「 分かった」

俺達が 外のグラウンドに出ると、アナウンスが流れた

《 これより 身体検査を開始します 》

そこには、レベル0の風紀委員と、その他は審査員が数名いた

《 それでは、刃宮 守 そこにいるレベル0の能力は？ 》

俺はその風紀委員をちらつと見て

守「 発電能力です」

《 それでは、プールに移動しましょう 》

くプールく

《 それでは、彼の能力を使い、全力を出してください 」

守「 はい」

守「（ 演算開始 ） 行きます ！！」

その時、瞳の言葉が脳裏をよぎる

（ 「 本気、見せないよ 」 ）

守「（ やってやるさ ！ ） 「

両手に力を込め 前方に放つ！！

バチィ！！！！！！

放たれた電撃は プールの水を一瞬で蒸発させた

あまりの威力に、全員の目が丸くなっている

只一人、瞳を除いて

《 それでは、彼の能力のレベルを上げてください 》

守「 はい」

俺は その風紀委員に近づき

守「 雷をイメージしてください。 雷が落ちてくる様子を
イメージするんです」

彼「 はい」

守「（ よし イメージ出来てる ）それじゃあ その雷を
落としてください」

彼「 え 此処にですか？」

守「 グラウンドの真ん中です」

彼「 ツ」

バリバリバリバリッ！！！！

グラウンドの真ん中に 雷が落ちた

審査員が 紙に何かを書いている

《 それでは最後に 御坂 美琴様の『超電磁砲』を 無力化し
てください 》

それと同時に御坂 美琴が現れる

守「（ 隠れてたのはやはり『レールガン』だったか ）」

俺は分かっていたので 大して驚かなかった

《 それでは 始めてください 》

守「 レールガン」 本気で来い ！！

美琴「 それじゃあ遠慮無く 行くわよ！！」

御坂はコインを上弾き、そのコインが ゆっくりと御坂の腕の前に落ちてくる

バチィ！！！！！！

圧倒的な破壊力を持つコインが音速の3倍で飛んでくる

守「 これが 『超電磁砲』」

俺は左手を前に出し

守「 『能力封じ』（スキルキラー）！！！！！！」

その瞬間　目の前まで迫っていたコインが消えた

正確には　コインが帯びていた『電撃』が消えた

美琴「なっ　　!？」

御坂も驚きを隠せないようだ

守「　これでいいか？」

瞳「　　上出来」

俺は審査員の方を向き

守「結果は　？」

《　総合評価『5』　》

その瞬間から 新たなレベル5が誕生した

瞳「はい、これ」

そう言って 帽子を渡してきた

守「ああ ったく、これ取られると疲れるって 知ってるだろ？」

瞳「だって、あの時取つとかないとまた忘れるでしょ？」

守「そんなことは って 何故それを！？」

瞳「私に嘘はつけないわ」

そう言う 瞳の顔は

とてもうれしそうだった

先代風紀委員長（前書き）

今回は少し 守が風紀委員になった経緯があります

先代風紀委員長

「守side」

（？）「今日からよろしくな。守」

パチッ

守「夢か」

瞳・明「せーのっ!!」

守「ぐあ!」

思いつき椅子を倒された

明「あ 起きましたか?」

守「下手すると起きれなくなってるぞ！？　そこら辺分かってんのか！？」

明「ダイジョブですよ。　何たって委員長は『レベル5』なんですからあゝ」

守「お前　レベル5をなんだと思ってるの？？」

瞳「そんなことはいいから　早く行くわよ」

守「　何処に？」

瞳「貴方の序列を聞きに行くのよ」

守「　ああゝ」

瞳「ほら、早く」

ゝ移動中ゝ

守「ここは？」

目の前には見知らぬ建物が

瞳「バンクを管理してるとこよ」

守「へえ」

俺達はその建物に入り、ある部屋の扉の前についた

瞳「ここからは貴方だけです」

守「あ そうなの？」

部屋に入ると 確かに優秀そうな、いかにも管理してそうな人が数人いた

しかも広い

守「失礼します」

男「お座りください」

俺は真ん中にあつた椅子に座る

男「刃宮 守、貴方は先日の身体検査でレベル5認定を受けました。レベル5には序列があることはご存知ですね？」

守「はい」

男「それでは、貴方の序列を発表します。 貴方は第六位です」

守「 六位？」

男「はい、それでは貴方の通り名ですが」

守「ちょっと待ってください！！ 第六位は『上原先輩』ですよ
ね！？ 何で俺が」

男「『上原^{かんばら}進^{すすむ}』は、2ヶ月前から行方不明となっています。
先日、レベル5認定を落しました」

守「 行方不明？」

そこで、俺の思考は止まった

男「はい、 それで 貴方の通り名ですが」

~~~~~

守「失礼しました」

瞳「どうでしたか？」

明「何位でした!？」

守「       すまん       一人にさせてくれ」

瞳「え?       あ」

俺は 一人、外に出た

守「 行方不明だなんて  
」

『上原 進』とは、先代の風紀委員長で、瞳の兄貴だ

守「 何処に行っちゃったんですか！ 上原先輩！  
」

俺は歯を噛み締める

~~~~~

守が小学生4年生だった頃、上原先輩と出会った

その日も 近道で裏路地を通ってしまったため、スキルアウト共に
追われていた

守「 ハッ ハッ
」

不良A「待ちやがれ！」

守「もう無理」

体力に限界が来てしまったため、立ち止まってしまった俺

不良A「ははははっ！観念したか！」

守「くそっ！」

俺が目をつむったとき

？「そこまでだ！！」

不良A「なんだてめえは！風紀委員！？」

？「そうだ！お前達を拘束する！！」

不良A「はっガキが！」

？「ガキだからってナメんな！」

その人は手から炎を出す

不良A「クソッ！ 能力者か！ 覚えてやがれ！」

そう言つて、不良達は去つていった

？「大丈夫かい？」

この時助けてくれたのが、当時中学一年生の上原先輩だ

進「すまない、俺がもっと早く気づいていたら」

守「いえ ありがとうございます」

進「上原 進だ。君は？」

守「え？」

進「名前」

守「あ　えと　守です。　刃宮　守」

進「守か　いい名前だ」

守「あ　ありがとうございます」

上原先輩はニコツと笑って

進「それじゃあ　気をつけてな」

そう言って去ろうとすると

守「あの！」

進「ん？」

守「風紀委員って、どうやったらなれるんですか？」

進「風紀委員になりたいのか？」

守「俺 強くなりたいんです！」

進「そうか 着いておいで」

俺は言われるがまま、上原先輩に着いていった

すると、ある建物の前についた

進「ここは、風紀委員を育成する所だ」

守「ここが」

上原先輩につられてなかに入ると目の前に受付があり、上原先輩が話している

俺はそのままエレベーターに乗って上の階に行き
扉が開くと
怖そうなおじさんがいた

進「先生、彼を風紀委員に入れてやってください」

先生「　　その彼は？」

守「　　えと　　刃宮　守です」

先生は　フム　と言うと

先生「着いてきなさい」

着いていくと　そこはグラウンドだった

先生「このトラックを限界まで走ってみろ」

進「先生、彼は先程までスキルアウトに追われていて、ずっと走っていました。さすがに今すぐには」

守「大丈夫です やれます」

俺はそう言って走り出した

もう全身がだるかったし、足もうまく動かなかった

それでも 俺は走った

強くなるために

何周走っただろう

もう数えてない

守「あっ」

俺は足が絡まって転んでしまった

守「もう 限界です」

先生は フム と言うと

先生「上原 彼を 休憩室へ連れて行ってあげなさい」

進「はい」

そこで俺の意識は途切れた

目をさますと 先生の部屋に連れていかれた

先生「まあ いいだろう。 上原、お前がしっかり面倒見るよ」

進「 分かりました」

俺は話がよく分からなかった

進「今日からよろしくな。 守」

そこで俺はすべてを理解し、その時から俺は風紀委員になった

通常、風紀委員とは 『各校より志願し、選抜された生徒達によって運営される、学園都市の治安維持機関』である。

風紀委員になるには 『九枚の契約書にサイン』し、『十三種類の適正試験』と『四ヶ月の研修』をクリアしなければなることはできない

俺は 異例中の異例なのである

だが、正確には俺は、『見習い風紀委員』となり、上原先輩について回るのが主な仕事だそうだ

そんなときに妹だった瞳に会い

しばらくして正式に風紀委員になった

それから三年後、上原先輩は風紀委員長になった

委員長補佐には瞳が着き、俺は本部配属になった

それから一年して、上原先輩は発火能力のレベル5になり、その序列が『第六位』だった

く現在く

守「上原先輩」

そんなとき

女「きゃあー！引ったくり！！」

目の前から 引ったくりをした不良達が原付にのって走ってくる

不良「おらぁ！！どけえ！！」

守「（ なんて ）」

原付が目の前に迫る

不良「殺されてえのか！！」

守「 何でお前らなんかがいて！！ 上原先輩がいねんだよ！！」

意識はしていない

だが、無意識に俺は 原付に向かって 炎を放ってしまった

不良「ぐああ　　！！あちい！！」

目の前で転がる不良達は　俺の方を向いて助けてくれと言ったよう
な目で俺を見る

だが俺は、　今はそんな気にはなれなかった

不良「た　助けてくれえ！！」

守「　お前らなんて　死んでしまえばいいんだ！！！！」

その時　不良達の炎が消えた

瞳「何やってるのよ！　殺す気！？」

そのとき俺は我に帰った

守「　あ　　ああああ！！！！」

自分でした事が受け入れられない

俺は 人を殺そうとした

守「 うわあああああ！！！！」

もう感情で自制が効かなくなった

周りにいる全員が頭を抱えてうずくまる

俺が、AIM拡散力場を暴走させたことで 周りの人に頭痛を起こさせてしまったのだ

守「うわあああああ！！！！」

瞳「守！！落ち着きなさい！！ まだ殺してはいないわ！」

その時、ある言葉が脳裏をよぎる

進「 守、この盾の腕章は、どんな意味があるんだと思う？」

守「意味ですか？ うーん」

進「俺はさ、『盾のように人を守る』って意味だと思う」

そう言った上原先輩の顔は、とても誇らしげだった

守「！！（やばい！早く抑えないと！）」

俺は我に帰り、力をコントロールする

守「ふう」

俺は落ち着きを取り戻した

瞳「守」

申し訳なさそうに、瞳が話しかけてくる

瞳「兄の事、聞いたんだね」

守「ああ」

瞳「嘘ついてて、ごめん」

嘘というのは、瞳は俺に上原先輩は旅行中と言っていたからだ

守「お前も辛いんだろ 謝らなくなっただけいい」

瞳「うん」

守「俺が守るよ」

瞳「え？」

守「上原先輩が守ってきたものは これから俺が守る！」

瞳「そう」

瞳は微笑んでくれた

守「お前も　これからサポートしてくれ」

瞳「　　うん！」

瞳は笑って答えてくれた

守「　　そう言えば、俺の通り名って何だろう。『「ミスター風紀委員長』
は風紀委員だけだし、レベル5の通り名って
」

《　　先日、風紀委員長、刃宮　守がレベル5に認定されました。
序列は第六位。二つ名は『アブソリュート・テリトリー絶対領域』。》

守「　　『絶対領域』??」

瞳「あんた聞いてなかったの??」

守「　　ああ、耳に入ってたかった」

瞳「何よそれ」

守「ふーん、『絶対領域』ねえ、まあ 間違っではないな」

瞳「さ、帰りましょ。『絶対領域』」

守「そこは名前呼べよ」

瞳「二つ名も名前よ」

瞳はそう言って、本部に着くまで俺の事をずっと『絶対領域』と呼んでいた

先代風紀委員長（後書き）

まだ至らぬところがあると思いますので

感想よろしくお願いしますm（
）m

一方通行（前書き）

投稿始めて一週間になりました

一方通行って難しいですね m ((m

一方通行

とある夕方

一人の少年が 学園都市を見渡せる高台の丘に居た

その少年は

髪は白く 目は赤く すれ違う人 100人が100人振り返るような容姿をしていた

一方「(チツ 今日で何人だア)」

彼は手すりにより 歯ぎしりをした

『二万人の妹達を殺せば、レベル6になれる』

そんな言葉から 彼の今の生活が始まった

毎日毎日、指定された時間割りとして、『超電磁砲』のクローンである『妹達』を殺している

その数今や8000人を越えている

クローンとは言え、血の通った人間を殺すことにためらいがないわけではない

だが、8000人も殺していれば、流石に麻痺してくる

一方通行は、そんな自分を否定したかった

だが確かに最近、自分でもためらいがなくなっていくていることに気付いている

だからこそ、そんな自分を否定したかった

人間として腐っていく自分に

耐えられなかった

一方通行はもう一度齒ぎしりをすると、大きなため息をついた

一方「　今さら俺に　後戻りはできねエ」

一方通行は、そんな自分を半ば諦めていた

一方「　帰るかア」

一方通行がそう思った矢先

最終下校時刻が過ぎていたことで、生徒が残っていないかと　巡回
していた守が居合わせる

守「　ちよっと、その人　」

守は一瞬、話しかけることに躊躇した

それだけ一方通行のまとう雰囲気は異質のものだった

一方「　あア？」

一方通行は守の方をギロリと睨む

守「 最終下校時刻は過ぎています。直ちに寮へ戻りなさい」

一方「（ 何だア？こいつ 俺が誰だかわかんねえのかア？）」

もう日が暮れているため

お互い顔が見えない

守「 おい、聞こえてんのか！？」

守は相手が聞こえてないのではないかと
少し怒鳴ってみる

一方「 チッ うぜエな」

そうボソツと呟くと

守の方へ足を進める

一方「 ドンだけびびるか 見ものだぜ」

守との距離は1m

ここですよやく お互いの顔が見えた

だが、守の反応は

一方通行の予想を裏切るものだった

守「お前 一方通行か？」

確認するように尋ねる

一方「フン、それがどオしたア？」

守「まじ！？ 本物！？ こりやついてる！」

ぱあっと守の顔が明るくなる

一方「 あア！？ 」

訳がわからない一方通行

守「初めまして 一方通行、俺は 刃宮 守、よろしくな！」

そう言って守は握手しようとする

一方「 ナンダァ？こいつ っ」

まだ意味が分からないといった感じの 一方通行

だがその時

守の手が弾かれた

それもそのはず 一方通行は能力を常に反射に設定しているため
触れることができる筈もない

守「 ？」

一瞬戸惑った守だが

守「（恥ずかしがりやなのかな　人は見かけによらないようだ
」

能力は感じるものの、それを解析していないため　一方通行がやっていることを理解していない守

一方「　誰だ？　てめエ？」

一方通行は睨みながら問いかけた

守「　ああ、そうか。まだ知らないか」

守は少し落ち込みながら言った

守「先日、第六位になった。『絶対領域』だ」

それを聞いた瞬間

一方通行の顔が陰しくなる

一方「（ 第六位だと？ まさかコイツ ）」

一方「 ナンダア？ 下克上でもしに来ましたってかア？」

一方通行は笑っているが 笑みとはかけ離れた笑いだ

まるで絶望を感じさせるような笑いだ

一方「（ これでコイツも俺の前から消え失せる 俺は孤独だ ）」

だが 守はまたも期待を裏切る

守「下克上？ そんなことしないよ」

まるで友達と話しているように軽く返す

一方「（ マジでナンナンだア？コイツはア！ ）」

一方通行は内心イライラしていた

あまりにも守の態度が予想と違うからだ

いつもならとつくに逃げている

だがなぜか コイツは自分を恐れていない

それが 一方通行は恐ろしかった

守「 まあまあ。そんな怖い顔せずに 晩飯食った？もしまだ
なら食いに行こうぜ」

あまりにも噛み合わない

一方通行はそう思った

コイツは異常だと

そう感じずにはいらなかった

守「 ちょっと話しようや」

この軽いノリが 一方通行には恐ろしかった

だが、そんな感情の中にも 沸き上がる安心感があった

自分が今孤独でないことに

一方通行は安心感を抱いていた

コイツならひょっとしたら 今の孤独から解放してくれるのではないかと

そんな感情が入り交じり

一方通行は答えを出せずにいた

そんな一方通行にしびれを切らしたのか

守「 まだだよな！ 行こう！」

半強制的に決定させた

少しの期待があつた一方通行は 渋々それに付いて行くことにした

二人が向かつたのはファミレス

守はメニューを手に取り

守「 なに食べる? 」

会つて数分の奴とは思えないほど自然に話し掛けてきた

一方「 コーヒー ブラックだ 」

守「じゃあ俺はスパゲティとお茶で」

それからしばらくして

注文していたメニューがきた

守「 お前コーヒーだけでいいのか？」

そんな質問を投げ掛けながら守はスパゲティを美味しそうに食べる

しばらく考え込むように黙っていた一方通行が口を開く

一方「 お前、『絶対領域』とか言ったなア、どんな能力なんだア？」

真剣な目で守を見る

守「 ー、簡単に言えば 能力を支配する能力 かな」

笑いながら守は答える

一方「能力を支配する能力だア？」

よく分からない様子の一方通行

守「俺の能力は AIM 拡散力場同士を干渉させることで 相手の能力を 強くしたり、使えなくしたり、時には俺が使ったり出来る能力だ」

一方「それで『絶対領域』かア、つまりその領域では お前は最強になれるつつう事だなア？」

ようやく理解できたような一方通行

守「 まあそうかな。 能力で俺に勝つのは理論上、不可能って事になってる」

一方「 そいつアおもしれえなア！」

一方通行が初めて笑った

最強である自分を倒すことが出来るかもしれない奴が現れたことに興奮を隠しきれないようだ

一方「 その能力の中じゃア 俺の能力も例外じゃねエんだろ？」

守「 まあ、能力全般に言えることだからな」

一方「 そオカよ」

一方通行は少し考え込んで

一方「 だが納得いかねえ それだけの能力があるなら ナン
で第六位なんだア？」

守は一つため息をついて

守「 俺の能力には 限界があるんだ」

一方「 限界？」

守「 ああ 、俺はいつもはこの帽子で能力を抑えててな、 いつ
でもどこでもレベル5って訳にはいかないんだ」

一方「 ナンでそんなモン 」

守「これを外しておける時間に限界があるんだ。そうだな、全開では 5 分位しか持たない。それだけ負荷の掛かる能力なんだ」

一方「　そオカよ」

これで納得したように頷く一方通行

守は時計を見て

守「　そろそろ帰んねえとな」

現在、11時をまわっている

一方「　そおだなア」

守「　なあ　連絡先交換しようぜ」

そう言つて守は携帯を取り出す

一方「　あア」

悪い気はしないのか 素直に交換してくれた

守「 じゃあ またな。今日は付き合わせて悪かったな。レベル5と話してみたかったんだ」

一方「 そオカよ」

守「 じゃ」

そう言って守はファミレスを出た

一人残った一方通行は

一方「（ アイツ 最後までよくわかんねえやつだったなア
」

だがその顔は、どことなく嬉しそうだった

一方通行（後書き）

感想よろしくお願いしますm（
—
—
）m

休日って 短いよね (前書き)

今回めっちゃめっちゃ短いです

休日の短さを表現しました

感想お願いします

m ((m

休日って 短いよね

守「いよっしゃあ!!!!!!!!!!」

守は突然グーにした両手を空に突き出す

瞳「 はしゃいでないで、仕事! 」

瞳は小さくため息をつきながら促す

瞳「 (まあ、嬉しい気持ちが分からないでも無いけど (」

それもそのはず

守や瞳は今週末 超久々の休暇がもらえたのだ

守「 待っていたよ この一言 !!! 」

守は依然として、喜びを噛み締めている

そんな守を見ながら瞳は

瞳「はあ」

呆れるしかなかった

守「今回の休日はenjoyするぞー!!」

守は一日中はしゃいでいた

く日曜日く

目覚まし時計が鳴り響く

時計は7時を指していた

守「今日は休日」

そう言って二度寝した

ふと、目が覚めると

守「んゝゝゝ、よく寝たゝ」

大きな伸びをして時計を見た

守「え？」

守は一度目をこすると

時計を凝視した

守「2時？」

時刻は午後二時

長くても昼には起きる筈が

2時間も過ぎていた

守「（　　）　　まずいぞ　　」

休日にはやらなければならないことが山ほどあった

青髪ピアスや土御門に借りたDVDを見なければならないし

部屋の掃除もしなければならない

考えたあげく

守「　　よし、両方を同時にこなせばいいんだ！！　　俺なら出来る
何たってレベル5なんだから！」

間違った解釈をしているが

もう自分では気づけないほど追い込まれていた

テレビとDVDの電源を点け、

右手に雑巾

左手に洗剤を持ち

守「いざ、掃除& a m p・DVD！」

そう気合いをいれ

テレビをチラチラと見ながら掃除を始めた

だがここで守は大きなミスをおかしてしまった

それは

守「　　うう　　泣ける　　」

そのDVDが感動物だったこと

（守の涙腺は弱いです）

この時点で掃除など　頭の片隅にも無かった

数時間後

そこにはハンカチを涙でびちょびちょにしながらクライマックスを見る守の姿が

それからしばらくして

午後八時

守「掃除終わってねー！」

その日は結局
せめてもと、窓をピカピカにして終わった

守「まあ、DVDは見たからいいか」

ポジティブな守だった

超能力者 vs 魔術師（前書き）

遅くなりました

今回は頑張って長めです

超能力者 v s 魔術師

時間飛んで 次の土曜日

今日は朝から委員長の仕事がある守

守「 はあ 」

やはり憂鬱さは隠せないようだ

それもそのはず、

先週の今は 休日を明日に控え

テンションが最高潮だったからだ

それ故、いつも以上に憂鬱なのである

守「 着いてしまった 」

目の前には本部

守は渋々中に入る

風紀委員「おはようございます 委員長」

風紀委員「おはようございます」

守「おはよう」

中に入ると すれ違う度に 挨拶をしなければならない

それすらも憂鬱だった

守は部屋に入ると そこには誰もいない

守「（　　）　　そう言えば今日は　　瞳は午後からだったな」

そんなことを思いながら椅子に座る

現在、 9 時

瞳が来るのは12時だから

守「あと3時間は静かだな」

等と思っていたが

一人の存在を忘れていた

明「おっはよーございまーす！」

ドアが壊れるのではと心配になるほど強く開け
ハイテンションの伊月が入ってきた

守「伊月はいつも元気だな」

半分呆れたように言う守

明「とーぜんじゃないですかー！ 私が暗かったら 明じゃなくて 暗になっちゃいますよー！」

それもそうだと 納得してしまう守だった

明「今日は 昼まで瞳さんが来ないからって サボらないで下さいねー？」

首を少し傾げながら伊月が言う

守「 お前まで」

味方が居なくなった守は、残念そうに肩を落とした

明「じゃあ これ お願いしますねー」

そう言つて 厚さ10?程の書類の山を置いて 部屋を出ていった

守「 はあ
」

守は諦めるように息を吐き、書類を手にとつた

「12時」

明「瞳さん、来ませんねー?」

少し前から居た伊月が 言つた

瞳はいつも、30分前には来ていた

守は今まで 瞳が遅刻するのを見たことがなかった

守「 そうだな
」

一通り書類を終わらせた守が言う

明「なんかあつたんですかねー？」

伊月は少し 心配している

守「まあ大丈夫だろ。 あいつはレベル4なんだし、風紀委員の中でも 名が知れてるし」

守も心配ではあったが、大して気にはしていなかった

明「でも、 瞳さんが遅刻なんて」

現在、 12時半

いつもではあり得ないことだ

守も、少しずつ心配が大きくなってきた

そこからさらに30分

（1時）

守は、流石に異常だと思った

遅刻するなら連絡が来るはずだと

無いと言うことは事件か 事故に巻き込まれた恐れがある

守「 ちょっと連絡してみるか 」

そう言っ て 携帯を取りだし、コールする

しかし、一向に繋がらない

それが守の心配に拍車をかけた

守「　少し見てくる」

そう言って　部屋を出ようとした矢先

守の携帯に一本の電話がかかった

発信は　瞳の携帯だ

守はすぐにとり

守「瞳か？　今どこだ？」

しかし、その返事は全く違っていた

？「やあ　守。元気だったかい？」

明るい声だが、この声を聞いた瞬間　守の額に冷や汗が垂れる

守は　この声に聞き覚えがあった

守「 お前 如月か!？」

守は酷く動揺していた

如月は、元学園都市の住民

元と言うのは 既に追放されているからだ

ここで少し時間をさかのぼる

〈3年前〉

その日、学園都市では 27人が刺殺され、1人が重傷を負った
事件が発生した

この 重傷を負った人物が 刃宮 守だ

当時中学一年生だった守は、いつものように 巡回していた

そんなときにこの快樂殺人は起こった

犯人は 『如月 大』
きさくき まさる

当時 高校2年生 だった

彼はレベル0だったため、凶器はナイフだった

その現場は、見るも無惨な光景だった

守が 駆けつけたときには既に21人の人間が殺されており
首だけの者、腹を裂かれ、内臓が飛び出している者、何度も刺され
た者など、様々な死体が転がっていた

そこでは 悲鳴と叫び声と共に 如月の高らかな笑い声が響いていた

守が止めに入るも、当時レベル3だった守には、どうすることも出
来ず、殺される間一髪のところ で 上原先輩に助けられた

後の被害者は 警備員である

如月は、当時未成年だったため、学園都市を追放され、少年院に送られた

（現在）

そんな 殺人犯が、あるうことが 瞳の携帯で 自分に掛けてきて いるのだ

動揺しないわけがない

如月「そうさ、良く覚えていたね」

声や口調では 明るい青年なのだが

本性は 快楽殺人犯だ

油断は出来ない

守は携帯のマイクを押さえ

簡単に 伊月に今の状況を説明する

電話の相手や、恐らく瞳が今置かれているであろう状況、そしてこれからの指示を

守「あとは頼む」

明「任せてください」

今回限りは明も真剣だ

守は携帯をコールのまま、走り出した

如月「気を付けろよ、ちょっとしたでも選択をミスったら命はねえぜ」

さっきまでとは全く違う雰囲気の声で、意味ありげに言うと、そこで電話は切れた

守「チッ！　　先ずは　瞳の居場所だ！」

守は外に出て　帽子をとると

守「『領域展開（ナビゲーション！）』」

守はAIM拡散力場を広範囲に展開し、学園都市を覆った

『領域展開』は　滝壺の　『能力追跡』と同じ効果がある

守「　　！　　見つけた！」

守「伊月！　　今から送る座標へ　警備員を向かわせてくれ！」

明「委員長はどうするんですか!？」

守「俺にはやる事がある。頼んだ」

明「了解しました。お気をつけて」

守「ありがとう」

そう言って携帯を切る

如月の居場所は分からないが、守はとりあえず瞳の居場所へ走り出した

瞳と如月が同じところにいる可能性が一番高いと考え

もしそうなら、引き離さなければ警備員に被害が出る

その前に見つけなければならぬからだ

しばらく走ると

そこには50人程のスキルアウトが居た

男「　　よお、ちつと死んでくれや　　委員長さんよお!!」

スキルアウトは既に臨戦態勢をとっていた

守「　　お前ら　　、一度しか言わない　　。失せる!!」

守はかなり焦っていたため、挑発にしか聞こえない言葉で促す事しか出来なかった

勿論、スキルアウトがそれで引く訳が無く

男「チヨーシにのんなあ!!」

50人が一斉に守へ襲いかかる

守「 忠告はしたからな ！」

守は飛び上がり、スキルアウト達のと真ん中に着地し

右足を上げ 振動の能力を付加する

そして

思いっきり地面に叩きつけた

ドォーーーーーン!!!!

守が震脚した場所から半径5mが陥没した

あまりの衝撃に スキルアウトは気を失っている

守「（ 如月の刺客か ）」

守はもう一度走り始めた

すると後ろから聞き覚えのある声が

如月「気を付けろって 言っただろ？」

如月は手に持っていたナイフを守の首筋目掛けて振り抜いた

如月「へえ」

守は間一髪でそれをかわした

守「やはり お前だっただんな」

守は如月を睨み付けながら言う

如月「まあな」

如月は当然と言ったように答えた

守「　だがお前はまだ　」

如月「『少年院にいるはずだ』か？」

如月は分かっていたように答える

守「　なぜだ　？」

如月「逃げ出したんだよ、少年院からなあ！！」

如月は不敵な笑みを浮かべながら答えた

守「　だがお前は、追放された筈だ！！　学園都市に入れる筈がない！」

如月「『筈』　ねえ　」

如月はまだ不敵な笑みを浮かべている

如月「　俺たちの力なら　造作もねえ　」

守「　俺達？」

如月「　それにしてもお前が風紀委員長で　レベル5とはなあ！」

話題を変えるように言った

如月「お前の事は外にも流れてるぜえ。　そのせいでお前はまた俺に殺されるんだ！！」

守「　どうゆう意味だ　？」

如月「俺はお前を殺したつもりだった　だがお前が生きっていると知って、こうしてわざわざ殺しに来てやったんだ」

守「　ならなぜ瞳を巻き込む!？」

守は睨みつける

如月「瞳？　ああ　あの女か　。それはお前とあの女が親しい関係だと見たからだ。あいつを襲えば　おのずとお前が出てくる。それだけの事だ　」

守「　そんな理由で　!」

如月「　声を聞かせてやろう　」

如月は携帯を取りだし、コールする

如月「　俺だ　女と替われ」

瞳「 》 守！ 》」

守「瞳！ 無事か！？」

瞳「 》 今のところは大丈夫 》」

声はかなり怯えていた

守「 直ぐに助けるから」

瞳「 》 うん 》」

そして声色が変わる

守「 おい、スキルアウト共。 瞳に手エ出したら 生きて帰
さねえ」

スピーカー越しに笑い声が聞こえる

瞳「 守 凄く怒ってる」

今の守を理解していたのは瞳だけだった

守「　　もういい　　電話を切れ　　」

そう如月に言うと、電話を切った

守「　　如月、お前は許さない　　！」

如月を睨みつける

如月「俺に半殺しにされた奴が何言ってやがる」

如月はバカにしたように笑っていた

守「　　あの頃とは違うんだ！！」

そう言つと、両手を伸ばし、手と手を向かい合わせる

すると　手と手の間から　凄まじい炎の塊が生まれた

そしてそれを如月に目掛けて放った！

ドォーーン！！

爆音と共に直撃した

かに見えたが

如月「あぶねえ あぶねえ
」

如月には当たらず、如月の目の前には一般の生徒が横たわっていた

守は この状況を理解できなかった

守「なんで
」

如月「知りたいか？」

如月は不敵な笑みを浮かべる

如月「それは俺が、人間を操る能力者だからだ！」

守「馬鹿な！？ お前は何の能力を持たないまま 学園都市を追放された筈だ！」

守は驚きを隠せない

如月「そう、これは超能力じゃない。 魔術だ」

守「魔術 だと？」

意味が分からないといったような守

如月「そう、魔術だ」

守「もし仮にそれが存在したとして、何故俺は平気なんだ？」

これが一番の疑問である

周りにいる野次馬にはかかって、自分にはかからないことに疑問を抱いたのだ

如月「それは分からねえ、実際これは範囲的なもんだから、お前もかかる筈だったんだがな」

如月は首を振って答えた

ここで守は 一つの仮説を作る

守「（俺は常に『能力封じ』を展開しているから 俺にはかからないのか？ つまり、能力であることには違いない。だが、こんな演算は感じたことがない。全くの異質だ。まるで水と油位違う）」

守は少なからず 魔術を理解し始めていた

守「ともかく、この能力を封じる！！」

守は魔術の解析を始めた

見たこともない情報が頭に流れ込んでくる

守「（　　）　なんだよこれ！　クソッ！！」

はやる気持ちを押さえ　落ち着いて解析することにした

守「（　　）　大体わかった　解析完了まであと10分　適応には
もう10分　）」

守の演算能力を持ってしても　直ぐには解析できなかった

それを見ていた如月が

如月「　　何黙ってんだよ！！　レベル5の名が泣くぞぉ！！さっ
さとかかってきやがれ！！」

如月が挑発するが、演算能力を解析にすべて使っている守には　攻
撃手段はおろか、今は丸腰である

如月「来ねえならこっちからいくぞお!!」

如月がそう言いはなつと 5人の学生が守目掛けて襲ってきた

守「グアッ!」

為すすべもなく

守は5人のサンドバック状態だった

そんな時

自分の周りに居た5人が居なくなつた

変わってそこには 一人の少年が立っていた

一方「よオ 何してんだア?」

守「一方通行!?なんでここに!?!」

守は驚きを隠せない

一方「爆発音が聞こえたんでなア その方向に来てみたら
人だかりの中でテメエがミンチされてたんでなア」

ナイスタイミングである

これで守は演算に集中出来る

守「一方通行、少しの間、誰も傷付けずに 時間を稼いでくれないか？」

一方「あア！？ テメエコイツら庇おうってかア！？」

一方通行が5人を睨む

守「違っんだ コイツらは皆、あいつに操られてるんだ
まだあいつの能力を理解出来てなくて まだ操られてんだ」

守は必死に説明する

一方「そオカよ」

一方通行も納得してくれたようだ

一方「時間を稼ぎゃあイインだな？」

そう言って一方通行はニヤリと笑い、守の前に立つ

守「ああ頼む」

如月「なんだてめえ テメエもミンチにされてえってかあ！
」

今度は20人近い生徒が一方通行に襲いかかる

だが、一方通行はそれをなんなく反射し、傷ひとつ負うことはなかった

如月「何！？」

一方「よオ テメエ誰に向かって喧嘩売ってんのか分かってんのかア！？」

一方通行が如月に詰め寄ろうとした時

守「上だ！！一方通行！！！」

一方「ああ！？」

どこからの攻撃だろうと反射してしまえばいい

その油断が災いした

ドオーン！！

一方「グアッ！」

空から黒い羽織に身を包んだ神父が、一方通行を殴りとばした

一方「なんだア！？」

訳が分かっていない一方通行

如月「 何しに来やがった!? シー!!!」

すると シーと呼ばれた神父が口を開いた

シー「 敵は二人だ ならばこちらも平等に二人にしようと思
ったのだ」

淡々と返す神父

如月「 チツ まあいい 邪魔すんなよ!!!」

シー「 無論だ」

守は焦っていた

この状況は最悪である

理由は分からないが一方通行の能力を破った神父

そして学園都市の住民を手玉にとる如月

対してこちらは

能力を破られた一方通行

そして未だに解析が済んでいない守

明らかに守達が不利である

如月「お前はその白い方を痛め付けて殺せ　こっちは手え
出すなよ」

シー「無論だ」

どうやら作戦が決まってしまったようだ

如月「さあ！！愉快的ショーの始まりだあ！！」

まるで無垢な子供のような言葉と同時に

守の周囲に居た30人近い一般人が守目掛けて襲ってきた

守「（　　）少しでも時間を稼がないと　　！）」

そう思った守は　右足を上げ　一方通行の能力を付加する

そして本日2度目の震脚

一方通行が近くに居たことで　『能力写し』を簡単にすることが出来た

守を中心として半径5m程のクレーターが出来た

思惑通り　如月は戸惑っている

だが

シー「　遊びはここまでだ」

右側から声がる

振り向くと腹部を蹴り飛ばされた

3 mほど飛んでいき

守「グッ ゲッホッ
」

今の一撃で恐らく肋骨の何本かは折れただろう

如月「 テメエ!!
」

如月が問い詰めるが

シー「 長居は無用だ
」

そう言つと 守の方へ歩き始める

守は一方通行の方へ目をやった

そこには自分と同じように一方通行が倒れていた

守「お前の能力は 一体」

意識がもつろうとするなか 守が尋ねる

シー「そうだな 教えてやろう 私の能力は自分に対する不利益な事象を無かったことにする能力だ」

守「まるで当麻の『幻想殺し』だな」

守の意識がかすんでいく

シー「せめて痛みを感じないよう殺してやる」

守「畜生」

守はそう呟くと目を閉じた

諦めてしまったのだ

シー「さらばだ」

そう言い 右手を突き立てた

辺りに赤いものが飛び散る

守「え」

しかし その血は守のものでなかった

それは

明「大丈夫ですかあ 委員長？」

まだ幼い女の子

明のものだった

明は腹部を刺されていた

刺された手を抜かれ 守の方へ崩れ落ちる

守「 どう して 」

明の腹部からは、赤色のドロツとした感触のものが溢れ出していた

守の目にはこぼれ落ちる涙が

明「 私 やっぱり心配で だって 委員長も 瞳さん
も 優しくって 好きだから 」

明はそう言い 笑うと、意識を失った

その瞬間 守の中の何かが壊れる音がした

守「 ああああああ！！」

頭を抱え その場に崩れ落ちる守

そして守は 明の能力の空間移動を使い 明を 『冥土返し』の病院へテレポートさせた

守「『冥土返し』 いい！ 必ず助けるお！ 死なせたらダメエを殺す！！』」

『念話能力』で冥土返しにコンタクトをとる

冥土返し「『任せなさい 必ず救って見せるよ』」

その言葉に満足した守は念話を終わる

そしてシーを睨み付けると

守「あああああああ！！」

また叫びだした守に変化が

守の体を、赤く光る数字の羅列が球体状に覆う

中は透けて見えており

守の目と髪は赤く変色し

頭の上には直径40?程の赤いリングが浮いている

これは 守の能力が脳に収まりきらなくなり 外に漏れ出たために
起きている現象である

一方「 何がおきてんだア? 」

意識を取り戻した一方通行は変わり果ててしまった守の姿に啞然と
した

それはまるで 『死へと誘う鬼神』 のようだった

守「　　デメエは許さねえ　　消し飛ばしてやる　　!!」

守が言い放つと　守の周囲に3つの赤い球体が生まれた

そしてそれは赤い閃光となり、シーを捉える

シー「　　無駄だ　　」

シーは能力で消えるだろうと確信していた

しかし

その力はシーの能力を越えていた

閃光がシーに直撃する

シー「　　馬鹿な　　!!」

目も眩むような赤い光が周囲を覆った

そして音もなく、シーは跡形もなく消え去った

シーが立っていた場所は 直径5 mほどの大穴が空いており 煙が
立ち込めている

一方「 嘘だろオ
」

一方通行も開いた口が塞がらない

それほど あの一撃は凄まじかった

守「 あとはてめえだあ!!」

そう言い 如月を睨みつける

如月「ハッ！撃てるもんなら撃ってみやがれ！！」

如月は自分を守るように指示をだす

しかし 一般人はその場に倒れ込んだ

如月「ああ！？どうゆうことだ！！」

守は既に 対魔術用の能力封じを完成させていた

如月はついに 只の無能力者になってしまった

如月「まっ 待ってくれ！！ 帰る！！もう二度とここには
来ない！！お前の前にも現れない！！誓う！！ 助けてくれ！！」

如月の悲痛な叫びも もう守には届かない

守は右手を如月の方へ突き出た

手のひらの前に 赤く光る球体が生まれる

守「 てめえにはもう希望はねえ 　ここで消してやる 　」

そう呟くと 赤い球を如月目掛けて放つ

そして

如月に直撃した瞬間

赤い光は5 m程の円柱になり、一直線に天を突いた

そして 音もなく 　跡形もなく 　如月はこの世から消え去った

守はその場に倒れ、守を覆っていた赤いものも消えた

守「 終わった
」

そこで守の意識は途切れた

超能力者 vs 魔術師（後書き）

一方通行のキャラ壊れてませんかね

感想お願いします

m ((m

能力の代償

守が倒れ込む

それを見た一方通行は反射で守の元へ跳んでいき 抱える

一方「 こいつア
」

一方通行は守の顔をじつと見る

一方「 こいつにこんな力があつたなんてなア
」

一方通行はフンツと鼻で笑う

そしてあることに気づいた

一方「（ 鼻血 ？）
」

守の鼻からは血が垂れていた

息も荒い

一方「（こりゃアやべえなア）」

そう思った一方通行は冥土返しの元へ駆けていった

瞳は無事 警備員によって救出され、今は冥土返しの病院の 集中治療室の前に居た

瞳「（明）」

瞳は涙を流していた

瞳「（私が 私が）」

瞳は自分のせいだと、自分を責めていた

そこへ 守が担架に乗せられ そのまま集中治療室に入っていた

瞳「え？ 守 ？」

そこへ一方通行がやって来た

一方「 オマエ ダレだ？ 」

瞳は振り返り 一方通行の方を見た

瞳の頬には涙が絶え間無く流れていた

一方通行は 初めは驚いたが 理解した

一方「 オマエ 『絶対領域』の知り合いか 」

瞳「 私のせいで 」

瞳は泣き出した

一方通行は 頭をガシガシとかき

一方「 ハア
」

とため息をつく と 向かいの椅子に腰掛けた

それから二時間後

集中治療室の扉が開き 冥土返しが汗を拭って出てきた

冥土返し「 もう心配要らないよ？ 二人とも無事だ」

瞳はその言葉に安心し 大粒の涙を流した

冥土返し「 場所を移そうか
」

そう言うと 自室に二人を案内した

冥土返し「彼女の方は 治療が速かったから そこまで酷くはない。
安心していいよ？ ただ、彼の方は少し難しいね」

そう言うと 冥土返しは渋い顔をした

冥土返し「あれは一体 何をすればあんなことになるんだい？
肋骨は問題じゃない、確かに破片が何本か肺に刺さってはいたがそれよりも 彼の脳の方が問題だ」

瞳「 脳 ですか？」

冥土返し「 ああ、恐らく彼は 当分は意識が戻らないだろう
ね」

瞳「 え？」

冥土返し「 彼の脳は 能力の使いすぎで 潰れる寸前まで来ていた
普通はそこまで能力を使うことはできない」

一方「 普通は なア」

冥土返し「　　どういう意味だい？」

ここで一方通行は　あつたことをすべて話した

守が殺されかけたこと

それを明が庇ったこと

それによつて　守に起きた変化など

冥土返し「　　なるほどね　　」

冥土返しは深くため息をついた

冥土返し「　　恐らくその赤い現象が　原因だろうね？　理由は分らないが、　それは脳の限界を超えてしまふ力なんだろうね？」

一方「　　多分なァ　　」

本来 能力は脳から創られるもの

にもかかわらず 守の能力は 脳の許容範囲を超えていた

あり得ないことだが そうとしか説明できなかった

一方「 いつ頃意識が戻るんだア ？」

冥土返し「 早くても 一月はかかるだろうね 」

瞳「 そんな 」

冥土返し「 それに、意識が戻っても 当分は能力は使えないだろうね？ いや、使わせてはならない 」

瞳「 どういう事ですか？ 」

冥土返し「 あれだけのダメージを負っているからね 休ませる必要があるんだよ 」

瞳「　　そんな　」

瞳は　目の前が真っ黒になる錯覚を覚えた

それが錯覚かは　誰にもわからない

冥土返し「　　ともかく、ここにいる間は絶対安静だよ？」

そう言うとき冥土返しは部屋を出ていった

今　瞳と　一方通行は　守と　明が寝ている病室にいた

もう涙が枯れてしまったのか　泣いてはいないが　目に生気を失っている瞳と

それを見て　ため息をついている一方通行

寝ている二人は 起きる気配は無い

明は 明日 明後日には目が覚めるだろうと冥土返しは言っていた

目を覚ました明が 今の瞳の状態を見れば 恐らくまた寝込んでしまっただろう

それほど やつれた顔をしていた

病室の中の空気は重く、一方通行はとても気まずかった

一方「 俺は帰る 」

そう言つと 一方通行は病室のドアに行った

瞳「 ありがとうございます 一方通行 」

感情はこもっているようには聞こえないが それを聞いた一方通行は

一方「別にイ」

そう言つて病室を出ていった

病室内には 機械的な音が響くだけだった

それから 二日して 明が目を覚ました

その時の瞳の顔が酷くやつれていて驚いていたが

隣で寝ている守に気づいた明は 深くは探らなかった

それから一週間後

流石に委員長、委員長補佐が連休ではまずいたため

本日は本部に顔を出した瞳と明

その時 他の風紀委員から守の事を聞かれたが 混乱を招くわけにはいかず、「ただ寝込んでいる」と伝えた

その事は思いの外信じてもらえて

ここに来て 守がサボりで良かったと思う瞳と明だった

それから毎日、瞳と明はお見舞いに行った

たまに一方通行が居たりしたが、自分達が来ると、直ぐに帰ってしまった

それからしばらくして、五月下旬

守の意識が戻った

懸念されていた 演算能力や、記憶への影響は無く

倒れる前の守と何ら変わらなかった

しかし、この一月で、学園都市の風紀は 完全に乱れてしまっていた

委員長不在の情報は 瞬く間に拡がり、今はかなり荒れている

風紀委員達も 今は大忙しだ

それでも、風紀委員達は守を気遣い、自分達で何とかしようとしている

その事を知った守は 直ぐにでも本部に戻ると言い出したが

瞳と明、そして冥土返しに止められ、今も病室にいる

それならばと、病室にモニターや通信器機を持ち込み、指示だけはさせてくれと冥土返しに泣きついた結果、それだけは許してもらえた

その甲斐あってか 勢い付いていたスキルアウトは瞬く間に沈静化した

学園都市の風紀は少しずつ戻っていった

六月に入り 守は退院した

能力の方も 少しずつ回復し、今はレベル4程度まで回復した

そんな時

土御門が話があると言つので 会いに行った

すると 土御門から思いもよらぬ言葉が

土御門「 守 、魔術について、知りたくはないか ?」

守「 は?」

土御門「 お前が魔術師と闘ったことは知っているぜよ」

守「 お前 一体」

土御門「 実は俺は、魔術師なんだぜい」

守「 なっ」

信じられない

といった反応をした守

土御門「 まあ立ち話もなんだ 着いてこい」

そう言って連れてこられたのは窓の無いビル

守「ここって」

ここは 委員長である自分も入ったことがない

そんなところに土御門は ズイズイと足を進める

気後れしながらも 守はそれに続いた

すると 暗闇から少女が出てきた

守「お前は 『座標移動』!？」

結標「あら、知っているの？」

土御門「そんなことはいい。早く案内しろ」

結標は「分かったわよ」といって 二人をテレポートさせる

移動して直後 守は目を丸くする

守「これって」

そこには 逆さまの状態で水槽の中で浮いている一人の男性がいた

土御門「奴は アレイスター・クロウリー。学園都市の理事長ぜよ」

守「あの人が」

守は会うのは初めてで

少し戸惑っている

アレイスター「何をしている そんなところで話そうと言うのか」

アレイスターにそう言われ 二人は水槽の前に立つ

アレイスター「刃宮 守 私に聞きたいことがあるだろう」

守「魔術について 教えてください」

アレイスター「魔術とは 教えて貰うものではなく 学ぶ方が早い 特に君の場合は」

守「どういことですか」

アレイスター「イギリス清教へ行くといい 手配はしておこう」

守「イギリス？」

アレイスター「土御門 お前も一緒に行け 後は任せる」

土御門「いくぞ」

守「は？ え？」

アレクスターとの話は これで終わった

二人はビルからでた

土御門「それじゃあ 来週辺りから イギリスに出発だにゃあ」

守「まてまて どういう事だよ？」

土御門「つまりお前は 本場で鍛えろって事ぜよ」

守「はあ？ いつまでだよ？」

土御門「それはお前次第だにゃあ」

分かったらさっさと帰れと言い 土御門は帰っていった

守「魔術を 本場で解析する か」

自分がイギリスに行くからには 風紀委員を任せなければならない

それが心配だった

守「 瞳に相談だな
」

そう言つと 守も帰路についた

土御門先生

守は翌日

本部で 昨日の事を瞳に相談した

勿論、魔術については言っていない

瞳「 どうして行かなくちゃいけないの？ 理由は何？」

守「 んー、まあ 旅行 ？」

バシッ

守「 叩かなくてもいいだろ ー」

守の頬を擦りながら瞳に何かを訴える目を向けた

瞳「本当の事言いなさい」

やはり瞳には敵わない

そう思いながら守は少し嬉しかった

誰よりも、自分よりも、自分を理解しているのは　やはり瞳なんだと

でも、今回の事には巻き込むわけにはいかない

守「　訳は　言えないんだ　」

守は俯きながら少し小さく言った

それを聞いた瞳は少し黙り

瞳「　　そう」

そう言って部屋を出ようとドアに近づく

そして　ドアの手前で

瞳「　好きにしたら？　でも、無理はしないで　、夏休み前には帰ってきなさいよ」

夏休みまで後一月

たった一月で魔術を理解するのは難しいかもしれない

でも、守は始めから　夏休みまでには帰ってくるつもりだった

自分が入院している間、本部の事は瞳に押し付けてしまった

その上更に　しばらく学園都市を離れると言っただ

自分の中でも一月だと決めていた

守「 ああ 分かってる」

瞳は小さくため息をつきながら部屋を出た

その日の夜

土御門「 支度はできたかにやあ？」

守「 ああ
」

少し後ろめたいが、やらなきゃならない事

後々 瞳達を守るためにも 今の内に行っておかなければならない

土御門「じゃあ行くぜよ」

そして土御門と共に守は学園都市を後にした

【イギリス】

守「んー！ やつと着いたあ！」

守は大きな伸びをして体の疲れを落とす

土御門「それじゃあ早速挨拶に行くぜよ」

守「ああ」

【イギリス清教】

守「 ーっが 」

立派な聖堂を見上げながら呟く

土御門「 俺から離れるなよ 」

守「 ん、ああ 」

土御門の後ろをテクテクと歩きながら聖堂へ入る

そこへは 背の高い女の人がいた

神裂「 土御門 そちらは？ 」

神裂は 守を少し睨みながら聞いた

土御門「 ああ こいつは俺のダチだ。 心配無いぜよ 」

神裂はスタスタと守に歩み寄る

神裂「貴方は何をしにこちらに？」

守よりも背の高い神裂は守を見下ろしながら言った

守「（ 背 高いな ） 魔術の事を知りたくて」

神裂「貴方は学園都市の方でしょう？ 何故その様なこと知りたいのですか？」

守「 少し事情が有りましたね 」

神裂「それは教えられることなのですか？」

尚も神裂の質問攻めは続く

守「 まあ、魔術が科学に干渉してきた。とだけ言っておきます」

神裂「 ！」

ここで神裂の顔色が変わる

神裂「それで　どうなったのですか？」

守は小さくため息をつきながら

守「　俺が始末しました　興奮してたんであまり覚えてないですけど
」

神裂「そうになると　貴方もそれなりにできるようですね
」

土御門「当然だにやあ、コイツはレベル5だからな」

神裂「　！」

また神裂の顔色が変わる

神裂「超能力者　」

守「　まあ、そう言うことになります」

神裂は少し黙り

神裂「つまり、その存在すら知らなかった魔術を 知りたくてここに来たのですね？」

守「まあ、そんなところですよケド」

神裂「けど？」

守「魔術を知るだけでなく その法則を理解するために来ました」

神裂「法則を ですか？」

守「超能力と魔術は 回路が全く違うんでね だから 理解しに来たんです」

神裂「残念ですが 理解したとしても超能力者の貴方には魔術は使えませんよ？」

守「俺は、異例でね」

守は含み笑いながら呟いた

神裂「異例？」

守「まあそれは後々」

神裂「まあいいでしょう。ゆっくりしてってください」

守「ありがとうございます」

土御門「それじゃあ部屋に案内するぜよ」

そして神裂と別れ、土御門に案内されて連れてこられた部屋は

守「やっぱ広いなあ」

そこは広々とした部屋だった

土御門「今日からここで寝起きしてもらう。ここは俺も寝起きするから襲ったりすんなよ？」

土御門はニヤニヤしながら言う

守「死ね」

土御門「もうちょっと優しい突っ込みはしてくれないかにやあ」

守「んなことはいい。もう疲れたから寝ようぜ」

守はあくびしながら言う

土御門「俺はまだ少し用事があるから先に寝とけ」

守「んそうかじゃあお休み」

土御門「おう」

イギリスの初日はそこで終わった

【翌日】

守「んで？ 何すればいいんだ？」

守と土御門、そして神裂は 聖堂から離れた 少し広めの高原に居た

土御門「 まあ、先ずは体術だにゃあ」

守「なんで!？」

土御門「お前はもう少し体術が出来た方がいい」

守「 だからなんで？」

土御門は少しため息をついて

土御門「　今までのお前の闘い方は、どっちかと言えば中遠距離戦だったからな。接近戦も出来ない、何かと不便だろう。それに、接近した方がお前の『絶対領域』を生かせるはずだ」

意外と考えてんだな、等と思ってしまった守だったが

土御門「　とりあえず俺と戦ってみればわかる」

と言った土御門の言葉で　そんな思いは飛んだ

守「　随分舐められてんだな　俺はこれでも武道はやってんだぜ？」

守は風紀委員という立場上、それなりに武術はかじっている

土御門「　まあすぐに分かるぜよ　但し能力は使っなよ？」

ニヤリと土御門が笑う

守「　当然だあ！！やったらあ！！！」

叫びながら土御門に向かっていく守

接近すると、土御門の方が先に攻撃に入った

土御門の右フックを下にかわし 低い体勢のまま 土御門の足を狙って回し蹴りする

土御門「よっとうっ!!」

土御門はそれを跳んでかわた

守「隙あり!!」

体勢を立て直し 土御門に右足蹴りをする

だが、

守「 痛っ!!」

土御門が右足のすねを右拳で殴り付ける

少し距離をとった守

守「（なんてかてえ拳だよ！！しかも蹴りが押し返されるなんて！！）」

右足のすねがジンジンと痛む

土御門「終わりにやあ？」

へらへらと笑いながら土御門が問いかけてくる

守「冗談！！」

今度は右腕を前にして 防御体制で向かっていく

すると土御門は正面から蹴ってきた

守「ぐっ！！」

両腕でそれを防いだが 守は後ろにはね飛ばされてしまった

それを見た土御門は

土御門「 根っこが弱いんだにやあ そんなんだから簡単に飛んでいくぜよ」

守「 根っこ ？」

守は「？」のような顔をしている

土御門「 要するに、安定してないってことだにやあ」

守「 」

土御門「 その証拠に、お前が突っ込んできてるのに、お前が飛んでいくだろ？」

守「 まあ 確かに 」

土御門「 もっと重心を意識しろ」

守「わかった」

守は先程より膝を曲げ、重心を低くとった

そして低い体勢のまま、土御門に突っ込む

寸前まで来ると、土御門が右足の回し蹴りをした

だが、今度はしっかりと踏ん張り、左腕で防いだ

そのまま左手で土御門の右足を掴み、引っ張りながら右手で熊手を土御門のほほに向かってお見舞いする

熊手は、体勢を崩された土御門のほほにクリーンヒットした

土御門「チッ！」

軽く舌打ちをして距離をとった土御門

土御門「やっぱりお前は飲み込みが早いぜよ」

少し、土御門の顔に焦りが出てきた

一方、コツをつかんだ守は

守「なるほど、重心ね」

そう呟いて

土御門の方へ駆けていく

今まで構えていなかった土御門は ボクサースタイルを構えた

接近すると、守が先に攻撃に入った

右足で一瞬で減速すると、左足でかかとからの回し蹴りをする

土御門「グッ！」

勢いをつけた回し蹴りは 片腕だけでは受けきれず ガードもろと

も土御門の左首筋に当たり、体勢が崩れる

ヨロヨロと後退りする土御門を追撃する守

守は土御門の左ほほ目掛けて右ストレートを繰り出す

間一髪でそれをかわした土御門

だが続いて左フックを土御門目掛けて放つ

土御門はかわすことが出来ず、両腕でそれを防いだ

また少し距離をとった土御門

最初とは、全く逆の立場になっていた

土御門「何てこった　飲み込みが早すぎるぜよ　」

正直　初日でここまで出来るようになるとは思っていなかった土御門は軽く舌打ちをする

土御門「　だが、弱点が無い訳じゃない　」

土御門はニヤリと笑うと

土御門「今度はこっちから行くぜよ!!」

初めて土御門から仕掛けた

土御門は守の右半身を注意しながら接近していく

すると　守の右ストレートが向かってくる

それを左腕で軽くないなし　土御門が右ストレートを放つ

守「　!!」

急な反撃に驚いた守だが、左腕でそれを防いだ

すると土御門は 一旦離れ、守の右ほほに裏拳を放つ

守は腰を回転させ 左腕でそれを防いだ

それを見た土御門は ニヤリと笑うと

右足で守の左横腹を蹴り飛ばした

守「グウ
！」

守は横腹をおさえながら後退りする

土御門は それを許さないとばかりに追撃する

軽くジャンプし、体を回転させ 右足で回し蹴りする

それを左腕で防いだ守だったが

守「あゝあ　！」

左腕に激痛がはしった

守はその場に両膝をついてしまった

土御門「　覚悟が足りないぜよ　」

守「　覚悟　だと　？」

土御門「お前は　殺意がないんだ　　そんなんじゃ俺は倒せないぜよ」

守「　ああ？　」

土御門「俺を殺す気で来な」

守「んなこと」

土御門「だからお前は甘いんだ!」

土御門の蹴りがみぞおちに入った

守「ガッ!」

守はその場につづくまる

土御門「お前、ほんとに死ぬぞ?」

その瞬間、今までの比でない殺気を守を襲う

守「!」

コイツは俺を殺す気だと、本能で感じた守は 覚悟を決めた

土御門「(目が変わったそれが戦士の目ぜよ)」

土御門はニヤリと笑い

守に向かって右足で飛び膝蹴りを放つ

守はそれを バックステップでかわし たった一歩で距離を詰めた

土御門「！！」

今までとは比べ物にならないほどの守の身体能力が、土御門の予想を上回った

守は左ストレートを土御門のみぞおち目掛けて放つ

それを両腕で防いだ土御門だったが、その時、守から目線を外してしまった

直ぐ様、守を見るがそこには

土御門「！！」

既に回し蹴りのモーションに入っている守の姿があった

反応が遅れた土御門の横腹に守の右足がめり込む

土御門「　グアッ!!」

そのまま五メートルほど飛んでいった

うつ伏せの状態で転がった土御門を　空中から　踏みつけようと飛んでくる守

土御門はゴロゴロと横に転がりながらかわし、仰向けの状態で止まった

そしてそれをまたぐようにして立つ守

無防備な土御門を目掛けて渾身の右ストレートを放つ

土御門「（　流石だぜ　）」

そう思った矢先

ピタッ

土御門に当たる少し手前で守の拳が止まる

守「 勝負アリだ 土御門!!」

守はニヤツと笑って手を差し出す

土御門「 参ったぜよ 」

土御門はその手を取り、立ち上がった

パンパンと服に着いた砂ぼこりをはたきながら

守「 しかし、土御門がここまで強いとは知らなかったよ」

土御門「　まあ、俺は二重スパイだからな　」

神裂「　土御門！！　」

離れて様子を見ていた神裂が怒鳴った

土御門「問題ない　コイツは既に魔術側を知っている」

神裂「しかし　！」

そんな神裂を無視して守を見る

守「　そんなことだろうと思ったよ　」

土御門「　わかっていたのか？　」

守「　まあ、そういう類だろうと言っことはな　」

土御門「　フッ、そうか　」

神裂はまだ納得いかない顔をしているが、土御門は清々しい顔をしていた

土御門「まあ、今日はこんなところだろう。今日はゆっくり休め」

守「ああ」

こうして イギリス初日を終えた

神裂 火織

【翌日】

守、土御門、神裂の3人は、昨日の修行場所に集まっていた

土御門「お前の進歩具合から スケジュールを大幅に詰めた。正直、俺と戦えるようになるまで5日はかかると思ってたからな」

守「 で？ 今日は何すんの？」

土御門「今日からお前には、武器を使ってもらっ」

そう言っ指差した方向には、頑丈そうな箱があった

守「あの中にあんのか？」

土御門「ああ」

守「で、今日もお前と戦うのか？」

土御門「いや、今日からは神裂ネーチンと戦ってもらう」

守「神裂さんと？」

そう言いながら、神裂の方を見る

神裂は守達とは少し離れた所で目を閉じて立っており、その手には木刀が握られていた

守「神裂さんと　ねえ　」

土御門「ネーチンは俺のようにはいけないぜい」

守「神裂さんって強いのか？」

土御門「勿論だ！！　まあ　頑張れよ」

そう言って土御門はどこかに行ってしまった

残された二人は、ただ黙って立っており、風の音がよく聞こえる

神裂「始めましょうか」

神裂が口を開いた

少し驚いたが、箱の中から警棒とトンファを出した

守「木刀でやるんですか？」

右手に警棒、左手にトンファをもち 尋ねる

神裂「ええ、これは殺し合いではなく、修行ですので」

守「前から思ってたんですが、なんで敬語なんですか？」

初めて会ったときから自分と敬語で話す神裂を 少し不思議に思っていた

自分は頼んでいる側なんだから、神裂はもつと堂々としてればいいのに　と

守「　　土御門なんかここに来てパシリの嵐だからな」

土御門は昨夜から

お前は生徒だにやあ

とか

喉乾いたなあ

とかで　事あるごとにパシる

これが普通だと思った守からすれば、神裂の対応は、少々丁寧すぎる

神裂「　　深い意味はありません　　行きますよ」

そう言って見開いた神裂の目から 凄まじい殺気が放たれた

守「っ
！」

思わず後退りしてしまった

神裂「 どうしました？ 」

守「 いえ 」

そう言って警棒とトンファを構える

守「 いきます！ はあー！！ 」

神裂にむかって駆け出し、警棒を降り下ろす

その時、時間が止まる錯覚を覚えた

守「？」

気付けば、仰向けになっている

ズキッ

右肩に鋭い痛みが走った

守「いつ!!」

神裂「そんなものですか？」

少し離れたところに神裂がいた

守と神裂のきよりは五メートル

守「こんなに飛ばされたのか」

神裂「辞めますか？」

ため息混じりに尋ねてくる

守「いやいや　まだまだ頼みますよ」

右肩を押さえながら立ち上がる

神裂「　では続けます」

そう言って、目にも止まらぬ速さで木刀をふった

それを守は感じ取った

「斬撃が来る」と

そこで守は　感じる斬撃にピンポイントでトンファをかざす

バキッ

左手のトンファは弾き飛ばされ、左手はズキズキと痛む

守「 斬撃って 飛ぶもんなんですか ？」

苦笑いを浮かべながら、呆れたように言う

神裂「これが抜刀の威力です」

守「 マジすか 」

もはや守は 信じる信じないではない

そんなことより 対応しなければならぬ

トンファを拾い上げ、構えをとった

神裂「 貴方は 土御門に何を教わったのですか？」

不意に、神裂が尋ねた

守「 えと、相手を殺す覚悟、かな」

神裂「 今の貴方からは、その覚悟は感じられませんか？」

少し呆れ気味だ

守「 まあそう焦らずに これからですよ」

神裂「 ！」

この時神裂が、バックステップで距離をとった

神裂「（ 私は何を ）」

自分で自分の行動の意図が掴めなかった

だが、直ぐに知ることになる

守「 行きます 」

ガキッ

警棒と木刀が交差する

ガキッ ガキッ

目にも止まらぬ速さで、二人は武器をぶつけ合い、移動し、またぶつけ合う

神裂「これは」

先程とはまるで違う捌きに、舌を巻く神裂

それでも、神裂と守の力の差は歴然だった

神裂「はっ――！」

ガキッ バキッ

守「　　っ！！」

左肩を突かれ、顔を歪ませた守

神裂「　　まだ無駄が多いですね」

息一つ上げず、そこに立つ神裂と

守「ゼエ　　ゼエ　　」

方膝をつき、汗だくの守

守「　　流石ですね　　」

神裂「　　貴方も　思っていたよりも出来ますね」

守「　　皮肉にしか聞こえませんか　　」

苦笑いを浮かべる守

神裂「これは本心です。超能力者の印象が大分変わりました」

守「超能力者を　ゼエ　なんだと思ってたんですか　？」

息を切らせながら、突っ込んでみた

神裂「　思い込みです　　気にしないでください」

守「　はあ　　そうですか　　」

少し納得いかない顔の守

神裂「　もう辞めますか？」

再度尋ねてくる

守「　いやいや、まだまだ　　」

そう言って立ち上がり、箱から木刀の長いものと短いものを取り出した

神裂「私を相手に、刀で挑むのですか？」

少し驚いた様子

守「ちょっと確かめたいことがありますてね」

そう言つて神裂の少し右側に向かつて、木刀をふつた

ズバンッ

神裂の右側には小さな筋が入り、砂埃が舞つた

神裂「斬撃を飛ばした！？」

守「フムなるほどね」

神裂「なっ何故！？」

驚きを隠せず、問いかける

守「能力を使わせてもらいました」

神裂「超能力ですか？」

守「ええ、まあ」

神裂「貴方の能力は？」

守「俺の能力は解析する能力です。神裂さんの斬撃を解析させてもらいました。俺が木刀を使うのも、神裂さんから剣術を学ぶためです」

神裂「それで木刀を」

守「さあ、どんどん頼みますよ」

そうしてまたぶつかり合う

バキッ
バキッ

守「（ 剣道はやった事あるけど あれじゃダメだ。
人を殺す剣術じゃないと、神裂さんは倒せない ）」

その時 守の短刀が神裂の首を捉えた

ゾッ

神裂の背中に寒気が走る

神裂は 人並み外れた身体能力でそれをかわし、距離をとった

神裂「（ 今の感じ さっきも ）」

守に対して距離をとったのはこれが二度目

最初は気付かなかったが、今は分かる

守の殺気に気圧されたのだ

何をとっても 上手の神裂だが、本能的に恐れてしまった

神裂「（　　これが彼の　底力　）」

神裂「　　やりますね　　それでは私も本気でやりましょう」

守「え　　？」

間髪入れずに斬りかかる神裂

バキッ　バキッ

当然、本気の神裂には手も足も出ず、身も心もズタズタになった二日目だった

母ともう一人の自分

【数日後】

今日も 木がぶつかり合う音が辺りに響く

バキッ バキッ

守を襲う 斬撃の応酬

それを左手に持った短刀でいなす守

神裂「大分出来るようになりましたね」

最初の頃の無表情ではなく、気持ち笑っている神裂

守「そうやって 闘いながら褒めるの止めてくださいよ」

最近、よく誉められているが、その直後にズタズタにされている

今日も

神裂「は！」

守「チッ！」

守は短刀を弾き飛ばされた

長刀で牽制しつつ、短刀を拾い 距離をとる

守「（ なんと云うか ）」

神裂の剣捌きは 大体 解析は終わっているが

それでも埋まらない神裂との差

神裂「 悲観することはありませんよ 貴方は良くやっている方です」

守「能力に 体が着いてこないなんて 思いませんでしたよ」

神裂「それでも大分上達しています。 息も上がっていないでしょう?」

その言葉にハッとした

確かに疲れてない

守「（俺も強くなってんだな）」

神裂「さあ、続けますよ」

そう言って向かってくる

バキッ バキッ

最初に比べれば、確かに強くなっている

神裂の斬撃にも対応できるし、回避速度も上がってる

それでも

守「グッ！」

神裂の蹴りが腹に響く

守「（埋まらねんだよなあ　この、身体能力の差が）」

少しため息をついた

神裂「少し休憩しましょう」

額の汗を拭きながら言う

守「そうしましょう」

汗でびっしょりになったシャツを脱ぎながらその場に座った

チラチラと神裂が見てくるが、守は気づいていない

土御門「調子はどうだ？」

そこに土御門がきた

守「神裂さんには敵わないね」

ため息をつきながら首を振って言う

それを土御門は

土御門「当然だにやあ。神裂ネーチンは体の作りが違っただぜい」

守「そうなのか？確かに身体能力は並外れて高いが」

土御門は「詳しくは言えないにやあ」といってニカツと笑う

守「そう言えば神裂さんはどんな魔術を使っんですか？」

神裂「それは教えられません」

きっぱりと言われてしまった

土御門も首を振っている

神裂「そろそろ始めますか」

守「そうですね」

そう言って立ち上がる

二人は向き合い、ピリツとした空気が辺りを包む

神裂「はあー!!」

少し距離のあるところで木刀をふった

守「（この距離で？）」

既に飛ぶ斬撃は見切っている守には、もう通用しないと神裂もわかっている

守「（牽制のつもりか？）」

そう思った直後

守「！」

神裂から殺気を感じ、防御の姿勢をとった

しかし

ズバ　ズバツ

守「　グアッ！」

木刀は切り落とされ、身体中に切れ目が入る

守「（　これは斬撃じゃない　　！　物理的なものだ　　！　）」

その時、神裂の手元が光るのを守は見逃さなかった

守「（　そうか！　ワイヤーか！　）」

身体中の皮膚に神経を集中させ、既にワイヤーが無いことを確認すると、一度距離をとった

守「　正に見えない武器ですね　『かまいたち』といったところですか　」

苦笑いを浮かべる

土御門「　刃宮！　」

そう言った土御門から木刀を受け取り　構える

神裂「　怯まないのですね　」

神裂が不思議そうに尋ねる

守「　まあ、種がわかればどおってこと無いですよ!」

そう言って、斬撃を飛ばす

斬撃は大した威力はない。

勿論極めれば人の体を斬ることは出来るだろう

神裂も出来る部類だ

神裂「　斬撃だと思っているのですか?」

そう言って　モーションに入る

そして

ザザザッ

地面に亀裂が入る

怯むかと思われた守だが

守「 種明かしだ！！」

そう言って地面に木刀を刺した

ワイヤーは木刀に絡まり、動く様子はない

瞬間、神裂と守の動きが止まった

神裂「 気付いていたのですね
」

守「 まあね。ワイヤーって事はあんたの手が光ったのと、地面の亀裂、そして俺の傷でピンときたんだ」

したり顔で言う

一方、神裂は

神裂「 たったそれだけで、攻略までされてしまうとは 」

そう言って肩を落としている

守「 地面を使わなければ攻略は出来そうにないですがね 」

神裂「 謙遜を 」

ため息をついている

土御門「 そろそろ終わらないか？ もう日が暮れるぞ 」

頃合いを見てか、土御門が帰ってきた

神裂「 そうですね、そろそろ終わりましょう 」

土御門「 飯は出来てる。さっさと帰るぜい 」

夕食を終え、神裂と土御門が話していた

神裂「彼は一体何者なのですか？ 彼の上達ぶりは異常です」

神裂が、これまでに思っていたことを土御門に話した

少しうつむいて、困惑気味だ

土御門「あいつに直接聞いてみたらどうだ？」

神裂「それが出来ないから、貴方に聞いているんです！」

机をダンッと叩き、土御門を睨む

土御門「ネーチンは どう思ってた？」

真剣な顔で聞き返す土御門

神裂「私は」

うつむいて小さな声でぶつぶつと口ごもる

神裂「あり得ないことですが 彼は聖人ではないか
と」

その声に力はなく、ぶつぶつと言った

神裂「そう考えれば、全てが納得できるんです」

土御門「ネーチンの考えは間違いじゃないと思っぜ」

神裂「と言うと？」

神裂は身を乗り出し、土御門の話を聞いた

土御門「あいつには境界というものがない。それがど
ういうことか、分かるか？」

首を振って否定する

土御門「つまり、超能力も、魔術も、あいつからすればどちらも『異能の力』って訳だ」

神裂「意味が良く」

土御門の話に首をかしげる

土御門「つまり、『超能力者は魔術を使うことは出来ない』と言う常識は、あいつには当てはまらないんだ」

尚も首をかしげる神裂に、少しため息をつきながら

土御門「あいつの脳は、魔術の回路と、超能力の回路を別々に持っている」

神裂「それは有り得ません!!」

神裂は立ち上がり、否定した

神裂「そんな人間が存在する筈が」

土御門「あいつが『只の人間』ならな」

神裂「なっ」

神裂は息を飲みながら話の続きを聞こうとするが

神裂「地震!？」

急に建物全体が揺れ始めた

土御門「違うな このピリピリと来る殺気は」

土御門は苦笑いを浮かべながら冷や汗を垂らす

土御門「一旦外に出るぞ!!」

土御門につられ、建物にいた者全員が、外に出た

そこで見たものは

神裂「 あれは 何ですか 」

建物の上にいる人影、その人物は赤い球体に覆われ、少し宙に浮いている

土御門「 どうなってんだ 」！

吐き捨てるように言う

神裂「 とにかく！ 彼を止めましょう！」

【 30 分前 】

守は、屋根の上で風に当たっていた

静かになって、落ち着くと思いつくあの日の事

守「あの力は 一体」

あの日、明を殺されかけたことで、興奮状態になった

その時発現した、赤い力

その時の自分は、自分であつて、自分でなかった

まるで、意識を乗っ取られた感覚に近かった

守「俺って 二重人格？」

そう呟いて 一人で笑ってみた

少しだけ笑い終えてから、深いため息を着いた

守「いくら考えても、あの力の正体はわかんねえんだよなあ」

《知りたい？》

背後から女の声がした

身を翻して距離をとり、声の方を見ると、世界が変わっていた

広い草原に立っていて、遠くには森が見える

守「どこだここは！ それにさっきの奴は！」

《ここは精神世界、君の心の中だよ》

今度は空から声がする

守「んなわけあるか！ さっさとこの幻覚を解け！」

空に向かって叫ぶ

《君は分かっている筈だよ、この世界は幻覚で作られたものじゃない》

守「クッ」

守は現在、能力を最大出力で使っている

だが、この世界の事は何一つ解らなかった

守「じゃあここが精神世界だとして！ お前は誰だ！」

《話が早くて助かるよ。そして君は私を知っている筈だよ》

守「わりいけど、声だけじゃわかんねえよ！」

どこを睨むわけでもないが、鋭い目付きで辺りを見る

《本当にわからないの？》

少し寂しそうな声になった

守も、知らないわけではない

分からないのだ

守「（この懐かしい感じは何なんだ！）」

思い出せない歯がゆさに舌打ちをする

悪い人ではない

これは確信していた

理由はない

勘でそれを感じていた

《仕方ない、遅かれ早かれ見せなくちゃならないし、これで混乱でもされたら困るしね》

少し諦めたように言くと目の前に光が集まりだした

それは少しずつ人の形になっていく

その姿は

守「 母さん ？」

小2の頃見た姿と変わらない母の姿だった

《久しぶり、覚えててくれたんだね》

目に少し涙を浮かべ 囁くような声で言う

一方、守も 久しぶりに会う母の姿に感動して 顔が歪んでいる

二人は抱擁し、ギュウツとしがみついた

《積もる話もあるけれど、時間がないの 手短に話すわ》

抱擁したまま話しかけてくる

《空に、赤い球が見えるでしょう?》

言われるがまま、空を見上げると、確かに赤い球があった

その中には

守「人？」

鎖を身体中に巻かれた人がいた

《あれはもう一人の　　と言うよりも、本来のあなたよ　　》

守「あれが俺？」

その姿は確かに、髪が白く、長いことを除けば、自分そっくりだった

《守が、学園都市で暮らすためには、あなたの力を封じる必要があったの》

守「どうして？」

《 守は、聖人と言う人を知ってる？ 》

守「え？ さあ
」

神裂の事を知らないため、聖人については知らない

《聖人と言うのはね、神の力の一端を得た人の事を言うの。実は守もそうなんだけど、アレイスターの条件で、あなたを学園都市に入れる代わりに聖人としての力を封印するっていう条件だったの》

守「 じゃあ、母さんも魔術師だったの？ 」

《私だけじゃなく、お父さんも魔術師よ》

告げられた真実

頭がパンク寸前の守だったが、ここでショーとするわけにはいかないと踏ん張る

守「 あと、ひょっとしてアレイスターって
」

《そう、学園都市の理事長よ》

守「　　そんな繋がりか　　」

《アレイスターとお父さんは、友人でありライバル関係だったの。
実力はアレイスターの方が上だったけど、お父さんもかなりの魔術
師だったのよ》

守「　　」

《そんな時、アレイスターが魔術側を裏切ったの》

守「　　なんで?」

母は、クスツと笑うと

《それは分からないわ。それで、アレイスターは魔術師討伐組織に
追われた》

守「　　父さんは?」

《お父さんは、アレイスターを守ったの。やっぱり、何か感じるものがあつたのかもね》

そして、うつむき気味に続けた

《その戦いで、お父さんは死んだわ》

突然告げられた父の死

守「え あっ
」

言葉にならなかった

《だからって、アレイスターを恨んではいけないわ。あれは、お父さんが決めたことだから》

諭すように言う

《昔話はここまでね
》

そう言っと、黄色い光る球になってしまった

守「 母さん!! 」

《大丈夫、消えたりしないから》

その言葉に安心した

《ここで本題だけど、あの封印を解かなくちゃならないの。あれを解けるのは自分だけ 心配しないで、あなたならもう大丈夫だから》

守「 何で解くの? 」

《あの力の暴走は、これが原因なのよ》

守「 あの封印が? 」

《そう、感情が高ぶって、一時的に封印が解けると、ああいうことになるの》

守「　じゃあ、どうやって解くの？」

守はその方法を聞いた

《それは自力よ。自分の力で封印を破るしかないの》

守「　ええ！？」

《頑張つて、私もついてるから》

守には、それが心強かった

解き方なんて、わからない

ただ、力と聞いて、すぐにこれが思い浮かんだ

守「　もう一度、あの力で！」

あの時、一時的に封印が解けた

それならば、破れる筈だと

あの時の感覚が戻ってくる

《あなたなら出来るわ》

母が応援している

守「あああああ!!」

叫び出すと、守の体が赤く光だし、目と髪の変色、頭上の輪、そして数字の羅列が現れた

すると、バチバチと音をたてて、封印の鎖が唸りだした

《頑張つて!!》

守「うおおおお!!」

力を振り絞り、最大の力で封印に対抗する

白い守に巻き付いていた鎖は、徐々に離れだした

《あと一息!!》

守「あああああ!!」

そして

パリーン

弾ける音と共に、鎖は消えた

空に浮かんでいた、白い守がゆっくりと落ちてくる

それを受け止めて、その場に寝かせる

守「ほんとにそっくりだ」

白い守を見ながら、呟く

すると、白い守が目を覚ました

守「あっ」

白い守は起き上がり

白い守「迷惑をかけた すまない」

そう 謝罪の言葉を呟く

守「いや、べつに」

若干、自分とは違う自分に戸惑っている

白い守「俺はあくまで力だから これからの事は心配しなくてもいい」

守「そうか」

《守、外が騒がしいわ。そろそろ戻らないと》

母が外の状況を伝える

守「そうなの？じゃあ戻らないと」

白い守「いつでも力になる。と言っても、俺は魔術しか使えないが」

守「そうか　お前は魔術側の俺なんだな」

そう言って、母の方を振り返り

守「会えて嬉しかった。また会えるかな？」

《私は常にあなたの中にいるから、心配しなくても、いつでも会えるわ》

守「　　そっか、よかった」

《じゃあ精神を戻すわ》

守「　　うん」

神裂「　　刃宮　守！！」

その声で、ハッと意識を戻す

守「　　戻ってる　　」

体に変化はない

そう確認すると、あれは夢だったのではと思った

土御門「驚いたぜ、お前がまた暴走するんじゃないかな」

守「 え？どゆこと？ 」

そこで、自分が精神世界に行っていた時、こっちの世界でも力を発現していたことを知った

神裂「 無事ならよいのです 」

小さくため息をつく

守は立ち上がると

守「 っと 」

転けそうになったが、土御門が支えた

土御門「 何があったかわからないが、とりあえず休め 」

守「 そつするよ 」

そのまま土御門の肩を借りて部屋まで行き、布団に横たわると 直

ぐに眠ってしまった

土御門「何があっただ
」

守の寝顔を見ながら、土御門はそう呟いた

母ともう一人の自分（後書き）

力を出すの 早すぎたかも（-o-;）

オリキャラ紹介？（前書き）

更新遅くなりました！

名前で悩んでいて

結局こんな名前にしてしまいました

オリキャラ紹介？

刃宮 守

現風紀委員長で、その実力は未知数

ただ、周りに能力者が居なければ大した強さはない

学園都市の偉い人が風紀委員長にもカツコ良く別の呼び名を作ろう
と『風紀委員長』^{コマンダー}となったが、その名で呼ばれることは滅多に無い
と言っより無い

一人っ子で両親を亡くしているため天涯孤独であるが、精神世界で
母と再会

その時もう一人の自分の存在を知る

父親はイギリス人、母親は日本人のハーフであるが、母似のため日
本人にしか見えない

父親も母親も魔術師で、キースも魔術師だが、守になってからは超
能力者となる

レベル4の時は『能力解析』^{アナリスト}であったが、本質とは違い、レベル5
では『絶対領域』^{アブソリュートテリトリー}に改められる

使える能力は違わないが、能力を解析しているのではなく、情報を
解析する能力であることが判明
その為改名

超能力は情報の塊であり、それを解析することで能力を得る

対魔術師戦では、非科学^{オカルト}である魔術の解析に手間取り、殺されかけるそこに割って入った明が刺され、そのショックで理性を失い、能力が暴走した

その時の状態、球体状の赤い数字の羅列は、脳に収まりきらなくなつた情報が漏れ出て、覆う形になったものである

漏れ出てはいるが、その情報も守の支配下にあるため、使用は可能だが、『脳に収まりきらない』脳に過負荷がかかる』であり、長時間の使用は出来ない

髪や目が赤くなるのは、数字の羅列と同じく理由は不明

頭の上のリングはいわゆる『第二の脳』であり、パソコンで言えば『外付けHDD』である

キースからの聖人の影響を少なからず受けているが、その力はキースの一割程度でしかない

キースⅡファルト

守のもうひとつの人格・精神

外見は守よりも大人で髪や目は白い

髪は長く、束ねていない

守自身でもあるため、思考や行動は同じだが、少し好戦的な面がある
魔術は聖人でもあるため、魔術師の中では最高位であり、名も知れていた

肉体が耐えられなかったせいで守のもうひとつの精神になったが、元は主人格だった

守の精神を潰し、主人格になることも出来るが、その意思は無く、あくまで自分は守の力になると言い張る

守の能力とは異なり、守が情報を数値化するのに対し、相手や周りから感じる覇気を読み取り、対応する

その為、守とは同じ状態にはならず、青白い炎のようなものを纏う

守の体を借りて外に出ることも出来るが、多量の聖人の精気に守の体が耐えられないため、長時間出続ける事は出来ず、更に封印の影響や、肉体の変化から、元の聖人の力の半分程度しか出せない

魔術名は『Fortis777（我が名が「最強」である理由をここに証明する）』

刃宮 咲

日本人で、守やキースの母親

仲間をサポートするタイプの魔術を使い、治癒や結界など、細かい術式を得意とする

キースの力を封じる際に、肉体の消滅を止めるため、自分の肉体を犠牲にした

その為、守の精神世界にいる

イギリス清教では、元禁書目録で三万八千冊の魔導書を管理していた
インデックスの先々代であり、インデックスは母親のように慕っている

性格は御坂 美鈴に似ている

レイ＝ファルト

守とキースの父親

容姿はキースよりも背が高く、髪は短めだが他はそっくり

消息は不明

実力はアレイスターの好敵手に成り得るほどで、アレイスターとは友人でありライバル関係で、アレイスターを最後まで味方した

困っている人が居ると助けたいくなる性格で、アレイスターの事も見棄てられずにキースと共に助けに行った

魔術師であり魔導師で、「魔の呪文」という魔導書を書いた

この書は、絶対的な権限を得ることの出来る書で、ファルトの血が無ければ扱うことの出来ない書

キースⅡファルト

守が眠りにつくと、母の呼ぶ声が聞こえた

《 守 守 》

その声の主を意識の中で探す

すると、先程と同じ、広い草原に立っていた

後ろからは母と自分が歩いてくる

白い守「やあ俺」

守「やあ俺」

どうせ自分なのだからこれでいいと思っていた守だが、そんな光景を見て母がクスリと笑った

母「あなた達、ややこしいわよ」

守同士顔を見合わせて、キョトンとしていると、急に笑いが込み上げてきた

守「 プッ」

一番最初に我慢できなかったのは守だった

白い守「 クッ」

それにつられるように吹き出したため、3人でしばらくの間お腹が痛くなるまで笑っていた

一通り笑い終えた後、母がクスリと笑いながら口を開いた

母「まさか、守とまた笑い合える日が来るとはね。ホントはね、会わないなら会わない方が良かったのよ。それはつまり封印を解く必要がないってことだからね」

その間、少ししんみりとした空気が流れる

苦笑いをしている母を見て、守が諭すように言った

守「そんなこと無いよ？」

そう言い、もう一人の自分と目を合わせる

守「俺は母さんに会えて嬉しかったよ？それに、自分とは違う自分に会えたし。これは必要だったんだよ。なあ、俺？」

そうして自分に同意を求める

白い守「まあね。実際、あのまま封印されとくのは、寂しかったし、苦しかった。でも、それよりも、お前が俺を拒否することが一番怖かった」

そして白い守は続けた

白い守「でも、お前が俺を拒否しなくて良かった。これでお前と一緒に戦える。お前の力になれる」

白い守は、右拳を握りしめ、何かを誓うように言った

母「あんたたち」

それを聞いていた母は、目に涙を浮かべ、まるで吹っ切れたように、ニコニコと笑っていた

守「それにしてもややこしいな、やっぱり別々に名前付けないか？お前を呼ぶとき戸惑う」

母「それなら問題ないわよ。だって彼には『キース』って名前があるもの」

守「え？そうだったのか」

キース「そうだ。キース＝ファルト。これが俺の名前だ」

フン「と鼻をならしながら言った」

守「でもなんで名前があるんだ？お前は俺なんだろう？」

首をかしげながら言った

キース「俺は『かつて』のお前だ」

その言葉で、守に疑問ができた

守「どう言つこと？」

母は少しため息をついて

母「この事は、もう少し経ってからだと思ってたんだけど　この
際話すわ」

時は遡ること　アレイスターが魔術師討伐組織に追われ始める頃

男「アレイスター＝クロウリー。貴様を処刑する」

黒い羽織に黒いフードを被った男達20人程にアレイスターは囲まれていた

アレイスター「フン、お前達^ごときが私を処刑すると言っのか？」

その顔には余裕がある

それもそのはず その時のアレイスターは名実共に最強最高だった

だがその自信に足元をすくわれた

アレイスターの足元に魔方陣が現れる

アレ「！ これは！」

男「もう遅い」

魔方陣の円周に等間隔に支柱が生え、そこからアレイスターに布を巻き付けた

アレ「グッ！」

男「もう動けまい」

支柱から炎が吹き出す

これはアレイスターの魔力

男「どんなに優れていても、それを出せねば意味がない」

アレイスターの意識が遠退き、意識を失う直前に彼らは現れた

バリイ！！

天井のガラスが割れ、男が二人舞い降りた

二人は着地と同時にアレイスターに巻き付いた布を切り落とした

男「！ 貴様ら！」

アレ「お前は」

その二人とは

レイ「久しいな アレイスター！」

キース「無事ですか！？」

アレイスターの好敵手 レイ「ファルトと、その息子、キース」
ファルトだった

キース「一先ずここを出ましょう！話はそれからです！」

そう言つて二人はアレイスターを連れ出した

男「逃がすか！」

男は燃え上がる熊を召喚した

だが

パチンッ

レイが指を鳴らすとその熊は消えた

男「くっ！」

レイ「悪く思っな」

そう言って三人は一先ず離脱した

この国にはもう (前書き)

色々書き方変えてスイマセン(・・・;))

主人公目線です

この国にはもう

とある路地裏

そこに、三人の男は壁にもたれ掛かっていた

レイ「何とか逃げ切ったか」

キース「その様ですね」

キースは、背中からアレイスターを下ろした

大人を背負いながら敵を撒けたのは、キースが聖人であるからだ

アレ「何故助けた お前達の助けなど必要ない」

プライドの高いアレイスターにとって、助けられることがどれ程屈辱かは、レイもキースも分かっている

故に、答えは決まっている

レイ「分かってるさ」

キース「でも、あなたを死なせるわけにはいかない」

アレ「何故だ？」

キース「あなたが死んだら、父さんの友達が居なくなるじゃないですか」

レイ「一寸までキース、俺の友達はアレイスターだけじゃないぞ？」

キース「そうかな、俺が知る限りではアレイスターさんだけだと思ってたけど」

レイ「そんなことはない！俺にだって友人くらい沢山居る！」

キース「ふん」

レイ「信じてないだろ！」

親子で言い合いをしている姿を見て、アレイスターはため息をついた

そのため息に気づいたキースは、訂正するように言った

キース「アレイスターさん、僕らはアレイスターさんを助けに来たんじゃないません。ただ、あなたに死なれると困るから介入させてもらったんです。だから、僕らが守ったのは、僕ら自身なんです」

アレ「こじつけだな」

キース「どう取るかはあなた次第です」

レイ「そんなことより、これからどうするんだ？当てはあるのか？」

アレ「そんなものはない。だが、日本に行こうと思っている」

レイ「日本に？」

アレ「ああ、日本は、こちらのように熱心な宗教家は少ない。私は日本行って科学者になろうと思っている」

レイ「思っているって　そんな簡単になれるものなのか？」

アレ「　愚問だな　私を誰だと思っている？」

その目は自信に満ち溢れていた

その目をして、先程殺されかけたと言うのに

キース「まあ良いでしょう。さっさと日本へ向かいましょう」

レイ「その事なんだが、キースは母さんを連れて来てくれないか？
恐らくこの国にはもう　」

キース「それもそうか　。分かりました、では先に行っていてください」

レイ「俺の居場所は分かるよな？」

キース「はい。しっかりと感じ取れます」

アレ「 感じ取れるとは 野生児でもあるまいし 」

俺たちの会話を聞いていたアレイスターは、先程の発言に対し少し小馬鹿にしたように笑った

でも今は時間がないため、俺は無視して母さんの所に向かった

この直後に、大規模な襲撃があるとは、夢にも思わずに

俺は、母さんに事情を説明し、母さんを背負って家を出た矢先

男「キース」ファルト。サキ「ファルト。貴様らを拘束する」

キース「どうして、こんなにも早く 」

家の前、否、家を囲っていたのは、三十数人の魔術師討伐組織の者達だった

咲「キース」

キース「心配ないよ、母さん。少し、中に居てください」

そう言っ、母さんを家の中に戻した

キース「俺達を拘束すると言いましたね。駆除の間違いでは？」

男「話が早くて結構。君にはここで死んでもらう。サキィファルトには人質になってもらう」

そう言っ、手のひらを下に向け、何かを唱え出した

すると、魔方陣が現れ、さらにそこから数多の蜂が出てきた

男「この蜂は猛毒を持っている。刺されれば一瞬であの世行きた。せめて痛みを感じるまでもなく殺してやる」

言い終わると、蜂が俺を襲ってきた

キース「お気遣いどうも。だけど、死ぬわけにはいかない
ortiss777!」

そう唱え、聖人の力を解放する

俺の身体は青白い炎に包まれた

男「魔法名　　！本気のような　　気をつけろ！奴は聖人！手強
いぞ！」

男が、組織の者に叫ぶように伝えた

そうしている間に、俺は両手、両足に力を集中する

すると、両手、両足に特別大きな炎が灯った

そして俺は、数多の蜂に向かって正拳突きで一蹴した

キース「とにかく、もう帰ってくれ。これ以上やるなら、手加減はしない」

俺はそう言っただけで睨み付けた

男「クッ
」

男達は、その場を大人しく撤退した

キース「これで終わると思えない。あつちも気になるし、行こう、母さん」

すると母さんは、両手一杯に荷物を抱え、家から出てきた

キース「一応聞くけど、それは？」

サキ「私の宝物！」

母さんは、目をキラキラさせながら言った

そんな場合じゃないのに

と思いつつも、今までの思い出を大切にしようとする母さんの姿を見て、俺は何も言えなかった

キース「行こう」

そう言って、足で地面をポンツと蹴り、転移術式の魔方陣を作り出した

キース「一先ず父さんと合流しよう」

俺が母さんの方を振り向くと、そこに母さんの姿はなかった

キース「あれ？母さん？」

一抹の不安がよぎった

だが、家の物音でその不安は消えた

10分位して、母さんが家から出てきた

その背中には、大きく膨れ上がった袋を担いでいた

俺は大きくため息をつくと、母さんと共に転移術式で父さんの下に
向かった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5320t/>

とある学園の風紀委員長（コマンダー）

2011年10月9日03時42分発行